The Great Punks

李中龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｔｈｅ　Ｇｒｅａｔ　Ｐｕｎｋｓ

【Ｎコード】

Ｎ７５４９Ｍ

【作者名】

李中龍

【あらすじ】

パンクロック精神あふれる高校生・沢村龍馬は、ちょっとおバカだがやる時はやる男（自称）！　そんな龍馬が巻き起こす、痛快青春学園アクションラブコメディー！

※更新は不定期です。

Track　1：START　TODAY？

４月８日、埼玉県さいたま市大宮区。今日は埼玉県立南陽（なんよう）高等学校の入学式だ。桜の並木道を、期待と不安に包まれた新入生が次々と校門をくぐっていく。

そんな新入生に混じって、ここに賑やかな身長１８０ｃｍぐらいの男が二人。ちょっとオシャレな現代風坊主頭の沢村龍馬（さわむらりょうま）と、ミディアムヘアの毛先を無造作に遊ばせた佐山祐介（さやまゆうすけ）の二人だ。彼らも今日から南陽高校の生徒になるわけだが、何故か他の生徒より目立っていた。

龍馬「あぁ～眠い……」

祐介「ウソつけ。お前目ェぱっちり開いてんぞ」

二人は中学時代からの親友だった。昨晩も入学祝と称して夜中の１時半までカラオケで騒いでいたらしい。

龍馬「いやぁ、それにしてもいよいよ高校生ですな」

祐介「何だいきなり。オヤジくせー言い方だな」

龍馬「だって楽しみじゃんかよ、高校生活ってさ。オレ興奮しちゃってなかなか寝付けなかったよ」

祐介「遠足前夜の小学生かお前は！」

そう言う祐介も実はあまり寝ていなかったりするのだが。

南陽高校に着いた。二人は会場となる体育館に向かい、それぞれのクラスを確認した。偶然にも二人とも同じクラスだった。

祐介「おっ、クラス一緒だな」

龍馬「４組か…やったなユースケ」

南陽高校の体育館は２階建てになっており、１階に柔道場と小アリーナが、２階には大アリーナがある。二人は２階の大アリーナへ駆け足で入り、自分たちの席に着くなりたちまち居眠りを始めてしまった。やはり昨晩のカラオケが効いたのか、二人は相当に眠かっ

たようだ。

入学式の途中、祐介が目を覚ました。ちょうど各クラスの担任教師を紹介するところだった。１組から順に紹介が始まり龍馬たち４組の番になった時、それまで寝ぼけ眼だった祐介の目が一気に見開いた。

自分達のクラスである１年４組の列の前に２０代半ばと見られる女性教師が立っている。やや猫顔で、美人の中にもかわいらしさを感じさせる顔立ちだ。祐介が思わず前の席でよだれを垂らして眠っている龍馬を叩き起こす。

祐介「おいリョウ（※龍馬のニックネーム）、起きろよ」

龍馬「なんだよ……お……？？」

願ってもいない幸運に、龍馬はどうリアクションしたらよいかわからなくなっていた。

龍馬＆祐介「ラッキー☆」

二人は顔を見合わせてニヤリと笑った。

教頭（※司会進行）『１年４組担任、水野菜々子（みずの ななこ）先生。担当教科は英語です』

龍馬「うひょ～、ナナコだって」

祐介「年いくつだ？」

龍馬「英語教師かぁ…」

祐介「成績落ちたら特別に個別指導とかやってくれるのかな」

何を根拠にそのようなことを言うのかはわからないが、そんな話をしているうちに入学式は終了し、新入生は各教室へと移動した。

龍馬「しっかし担任の先生かわいかったね～（＊＾０＾＊）　ナナコちゃんだっけ？」

祐介「ナナコちゃんって…もう友達気取りかよ（｜＿｜；　まぁ確かにかわいかったけどな。てか、あの顔はエロい！」

龍馬「あぁ、あれはエロいね。オレわざとテストで赤点取ろうかな。

そんで放課後特別に指導してもらおうっと」
　その時、教室のドアが開いて担任の水野菜々子が入ってきた。
菜々子「えー、皆さん入学式お疲れ様でした。今日からこのクラスの担任する水野菜々子です。1年間よろしくお願いします！」
　それから菜々子は簡単に自己紹介をした。その中で、彼女が現在２４歳（社会人3年目）だということがわかった。
祐介「おっ、２４だってよ」
龍馬「オレ射程距離内。声もいいし」
祐介「まさかお前、惚れたりしないだろうな？」
龍馬「いーやわかんねーぞ。あんだけレベル高かったらいっちゃうかもな」
祐介「惚れっぽいヤツ！」
龍馬「しょうがねぇ。男の性ってもんだ。ユースケだって年上の女に甘えてみてぇって思ったことあんだろ？」
妙に説得力のある言葉だ。祐介は思わずうなずいてしまった。
菜々子「沢村くん！」
龍馬「はっ、はい！？」
菜々子「呼んだらちゃんと返事してよね！」
菜々子はさっきから出席をとっていた。
龍馬「はい、すんませんでした」
菜々子「それから聞きたいんだけど、あたしの顔ってそんなにエロい？」
龍馬（げっ！）
祐介（聞こえてやがったか…！）
菜々子「残念ながらキミらの期待には応えられないので」
龍馬「え～マジで～……（＊３＊）」
祐介「いやマジでヘコむなよ！（@ｏ@）」
周りからクスクスと笑い声が起こった。
　放課後になった。龍馬と祐介はＪＲ大宮駅前にある「ドリームフ

ァイヤー」というゲームセンターへ遊びに行った。なんでも、最近入荷された格闘ゲームにハマッているらしく、それをやりに行くのだという。

　ゲームセンターに着くなり、龍馬が５００円玉を両替しに行った。その間に祐介がお目当ての格闘ゲームをプレイし始めた。開始直後に反対側から誰かが対戦を申し込んできた（※このゲーム機は通信対戦型になっている）。祐介は少し横に身を乗り出しゲーム機の反対側を見る。龍馬ではない。学ラン姿の高校生だ。

　しかし、この男は祐介の敵ではなく、簡単にねじ伏せられてしまった。それにもかかわらずその男は祐介に再戦を挑んできた。祐介はそれから2度、その男を画面の中で叩きのめした。その男があきらめて台を離れると同時に、龍馬が両替を済ませて戻ってきた。

龍馬「お～う、やっとるかぁ」

祐介「やっとるで～。もう3連勝」

龍馬「ほう…。だが、オレが連勝を3で止めてやるぜ」

祐介「やってみ？　今日のオレはとりわけ調子がいいみたいだぜ」

龍馬「そのセリフ、二度と言えないようにしてやろうか？」

祐介「いいから早く入れよ。お前一度もオレに勝ったことねーじゃん」

龍馬「ケッ！」

龍馬は祐介を睨みつけつつ反対側へ回った。

龍馬「見てやがれ…」

なかなかいい勝負だったが、勝ったのは祐介だった。

龍馬「だぁー！！　また負けた！」

祐介「まだ甘（ぁ）めーな。お前の攻撃パターンは見切った」

　龍馬が台を離れた瞬間、別の男が祐介に闘いを挑んだ。

祐介「今日は乱入日和ですな」

龍馬「乱入日和ですな…って、お前うかれてんじゃねぇ？」

上機嫌の祐介。しかし、この男に彼は圧倒されてしまう。自分の攻撃パターンがまったく通じないのだ。気づいた時には祐介が敗北を

喫していた。
祐介「くっそ～、一体誰なんだ？」
龍馬と祐介は思わず台の反対側へ回った。プレイしていたのは自分達と同じぐらいの、学ランを着た高校生だった。がっしりとした体格の男だ。二人はその男のプレイをじっと見ていた。かなりやりこんでいる様子だ。これでは自分がかなうはずがないと祐介は納得した。ゲームのラストボスさえその男には赤子も同然だった。
龍馬「うわ、とうとうクリアしちゃったよ」
男が立ち上がり、振り返る。龍馬・祐介と目が合った。二人よりも若干背が高い。イメージとしては、刑事ドラマ「太陽にほえろ！」のゴリさんこと石塚刑事だ。
祐介「あれ……？」
祐介が何か思い出したように言う。男も何か思い出したように立ち止まる。
祐介「確か、同じクラスの…山崎くんだよね？」
男「うん。そうだよ」
男の名前は山崎延彦（やまざきのぶひこ）。龍馬と祐介のクラスメートが、偶然ゲーム上の対戦相手だったというわけである。
延彦「えーと…確か沢村くんに佐山くんだったよね？」
龍馬「おぉ！　オレらのこと知ってる！」
延彦「入学早々先生の顔をエロいって言うんだもん、かなり印象に残ったよ」
龍馬は恥ずかしそうな顔をした。
龍馬「いやいやいやいや、だってエロいでしょあの顔は！　ちょっと甘えてみたくならない？」
延彦「まぁ確かにね。年も若いし」
龍馬「だろ？　憧れちゃうよな～！」
3人は初めて会ったのにもかかわらず、親しい友人同士のように談笑していた。
　話が一段落したところで、龍馬が缶ジュースを買いに行くためい

ったん話の輪から外れた。そういえば、龍馬は入学式の時から水１滴飲んでいなかった。喉が渇くのも仕方がない。
　鼻歌を歌いながら自販機の前に立ち、アミノサプリ（※３５０ｍｌ缶）のボタンを押す。隣では二人組の女子高生が龍馬と同じようにジュースを買い、楽しそうにおしゃべりしながらそれを飲んでいる。
　龍馬が取り出し口から缶を取り出した瞬間だった。隣の女子高生がおしゃべりに夢中で龍馬に気づかず、ヒザから思い切りぶつかってしまい、その反動で飲みかけのオレンジジュースが龍馬の顔にかかってしまった。ぶつかった女子高生は慌てて持っているジュースを連れの女性に渡し、素早くハンカチを出して龍馬に駆け寄った。
女子高生１「ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか！？」
龍馬「あ、オレなら大丈夫だよ。気にしないで」
結構かわいらしい娘だった。肩ぐらいに伸ばしてあるストレートの髪、二重でパッチリと澄んだ瞳をしている。彼女は必死な顔つきで龍馬の顔を拭き始めた。龍馬は、口では「いいよ、大丈夫だよ」と言ってはいるが、こんな状況でもかわいい女の子に近寄られては本能的にそれを拒否できなかった。
女子高生２「も～、何やってんのよぉ～」
後ろで見ていた連れの女性が「しょうがないなぁ」というような顔をする。この連れの女性もなかなかかわいい。かわいいというより色っぽさを感じる。女性にしては背が高く、スタイルもよい。長さは彼女も肩ほどだがパーマがかかっている。そしてその二重の目はどこか気の強そうな感じがした。
女子高生１「ホント、すいませんでした！」
龍馬の顔がもと通りきれいになった。
龍馬「いやいや、マジ気にしなくていいから。人間誰だってミスはある！」
龍馬は、祐介の前では決して見せないようなさわやかな顔を作ってみせた。相手の女子高生もかすかに笑みを浮かべる。

女子高生2「マジごめんね～。この子ドジなもんで」
女子高生1は顔を赤くしてうつむいた。
龍馬「まぁまぁ、もう済んだことだからいいじゃん。オレは全然気にしてないし」
むしろ幸運だと思っている。
女子高生1「今度から気をつけます（＾＾；」
龍馬「うん、そうだね。そんじゃあオレは行くよ。友達が向こうで待ってるから」
女子高生2「じゃーねー☆」
女子高生1も手を振った。龍馬もそれに笑顔で応え、くるりと踵を返した。

祐介「おいリョウ、お前何ニヤけてんだ？」
龍馬が祐介と延彦のいる所へ戻ると、真っ先に祐介がつっこんだ。
龍馬「誰がニヤけてるって？」
祐介「さてはいいことあったな。女か？」
祐介はざっとゲームセンターの中を見回した。先ほどの女子高生二人組がちょうど店を出ようとしているのが見えた。
祐介「あれか？」
龍馬「いちいち見るなバカ！」
祐介「ありゃウチの制服じゃないか？」
龍馬「ウソ？　オレ気づかなかったよ」
延彦「そうだよ、あれウチの制服だよ」
祐介「しかもタメっぽいぞ。いいなぁ～リョウ」
龍馬「じゃあ、これをきっかけに仲良くなっとくか？」
延彦「え？」
龍馬「オレらもあの子らの後を追ってさ、偶然を装って『あらぁ、また会ったね』なんて感じで話しかけてみようぜ」
祐介「そうだな。お前だけおいしい思いさせとくのも納得いかねーしな」

龍馬「じゃ、行くか」
延彦「ホ、ホントに行くのか？」
龍馬「そうだよ。山崎くんは行かないの？」
延彦「い、いや、オレも行くけど…」
延彦はやや恥ずかしそうに答えた。

二人組の女子高生は、これからカラオケに行くため店を出た。理由は龍馬達と同様、「入学祝」だった。
？「ねえねえ！」
二人の背後から誰かが声をかけた。振り返ると、背の低い痩せ型の高校生がニヤニヤしながら近寄ってきた。見たところ１～２歳は年が上のようだ。
男「キミ達どこ行くん？」
二人は気にせず先へ行こうとした。すると女子高生２の進路に別の男（以後男２）が回り込んだ。こちらは痩せ型だが身長が１８０ｃｍぐらいある。
男２「その制服、ウチの学校だよね？」
女子高生２「違います」
女子高生２は機械的に返事をして男２をすり抜けた。だが、今度は二人の通行を完全に妨害する形で金髪の男（以後男３）が回り込んできた。金髪の男３は背も高く体格もいいため、二人は思わず立ち止まってしまった。
男３「ねぇ、シカトしないでよ。オレら退屈なんだ。さっきもゲーム負けちゃってさ。だから一緒に遊びに行こうよ！」
女子高生１「すいません、ウチらちょっと用事あるんで……」
男２「１時間だけでもいいから！」
男１「そんな急ぎじゃないんでしょ？」
女子高生１「いや、急ぎなんですよね…」
男１「じゃあその用事が終わった後でも！」
男３「なんならオレらがつきあってやろうか？」

女子高生2「いや、ホント急ぎますから！」
強引に通り抜けようとした時、男3が女子高生2の腕をつかんだ。
女子高生2の顔が引きつる。
男3「オレらが一緒につきあってやろうっつってんじゃん。そんなに冷たくしなくたっていいじゃんか」
男2「なんだよ、オレらじゃダメなのかよ。さっき別のヤツと仲良さそうに話してたのにさ」
女子高生1&2「！？」
別のヤツ……？　さっきジュースをかけてしまったあの人のことだと彼女達は思った。
女子高生2「ヤダ、見てたの！？　キモーイ！！」
思わず本音をぶちまけてしまった。男達の表情が一変して、3人とも攻撃的な目つきになった。女子高生達はそれを見て固まってしまった。
男3「誰がキモイんだコラァ！！」
男3が女子高生2の腕を思い切り引っ張る。

＊「おめーら以外にキモイ人間がどこにいんだよ！」
その場にいた全員が声のした方を向いた。
　声の主は龍馬だった。後ろには祐介と延彦もいる。
男2「誰だ！」
龍馬「その子らはオレらと用事があんの。だから放してやってくれない？」
男2「はぁ？　ふざけんなよ。オレらがこいつらと用事があんだよ」
龍馬「いや、どう見ても困ってたぞ」
男1「いちいちうるせーな！　おめーにゃ関係ねーだろが！　てか、誰なんだよ！」
祐介「誰だっていいじゃん。おめーらには関係ねぇ」
男1「ぐ……」
男3が女子高生2の腕を放し、龍馬たちに歩み寄った。同時に他の

二人もじりじりと近づいてきた。その隙に、龍馬が二人の女子高生に「今のうちに逃げろ」とアイコンタクトをした。少しためらったが、彼女達はサッと大宮駅の方向へ走っていった。
延彦「おい、女を追わなくていいのか？」
祐介「女に自分がやられるところを見られたくねーんだろ」
男3「それはおめーらじゃねーのか？　てか、お前さっきゲームでオレに卑怯な戦法使っただろ？」
男3は祐介を指差して言った。
祐介「卑怯な戦法…？　あ、もしかしてオレに3連敗したヤツ？」
龍馬「マジ？　うわ～恥ずかしい」
祐介「で、何？　負け惜しみでも聞いてほしいわけ？」
祐介はものすごく面倒臭そうな顔をした。
男3「あ？　負け惜しみだぁ？　ハメ技使っといて何言ってやがる！」
祐介はあきれてものが言えなかった。決してずるいやり方をしたわけでもないのにどうして因縁をつけられなければならないのだろうか。しかも、たかがゲームなのに。
龍馬「大人気（おとなげ）ねぇ～…」
男3「おい、おめーも何なんだよ。さっきから生意気言いやがって」
龍馬「あ？　大人気ないと思ったから大人気ないって言っただけじゃねーか」
男2「てか、お前らウチの1年だろ？　上級生は敬うべきだって教えられなかったか？」
祐介「なんだ、オタクら上級生だったの？　こいつは失礼した。あまりにもド低能すぎて全然そんな感じがしなかったよ」
延彦「ド低能……」
男3「てめぇ！　調子にのんなよ！」
龍馬「はいはい、わかったわかった。相手すりゃいいんでしょ？」
しょうがないなぁ、というような顔をする龍馬。
延彦「おい、あれ…」

その時延彦が何かに気づいた。
祐介「ん？」
龍馬と祐介もそれに気づく。延彦の視線は男達のはるか後方にあった。何者かがこちらに近づいてくる。スーツ姿で髪の長い女性だ。
龍馬「おい、あれって…」
その女性は龍馬達の担任・水野菜々子だった。雑用で外出していたのだ。
龍馬「やべぇ！　ナナコちゃんだ！」
男３「おめーらさっきから何をコソコソしゃべってんだよ」
祐介「おい、年上の女に逆ナンされたいって思ったことあるか？」
ニヤリと笑いながら祐介は言った。
男３「あ？」
男３は眉間にシワをよせて、わけのわからなそうな表情を作った。
菜々子「キミ達そこで何してんの！」
男達はビクリとして後ろを振り返った。
龍馬「今だ！」
龍馬達は、一斉に勢いよく、大宮駅の方向へ駆け出した。
男１「あっ！　あいつら！」
男３「とりあえず逃げるぞ！」
男達もあわてながら街中へ走り去った。
菜々子「ちょっと！　待ちなさい！」
菜々子の声は街の喧騒にかき消されてしまった。
菜々子「あ、あの子らは確かウチのクラスの・・・・・・」

　龍馬達は大宮駅構内にあるルミネに逃げ込んだ。
龍馬「ふぅ、ここまで来りゃ大丈夫だろ」
祐介「しっかしナナコちゃんに出くわすとはなぁ」
龍馬「あぁ。入学初日からとんだハプニングに巻き込まれちまったな」
延彦「それにしても、あの子らはちゃんと逃げられたかな」

祐介「うーん、大丈夫じゃない？　オレとしてはすぐ逃がしちゃうんじゃなくて、話ぐらいはしたかったんだけど」
龍馬「まぁ、同じ学校なんだし、話すチャンスはいくらでもあるよ」
祐介「…だな♪」
龍馬「それよりメシ食いに行かねぇ？　ダッシュしたら腹減っちまった」

Track 1：START TODAY？

翌日――。

※「あー！　おはよー！！」

教室に入ってきた龍馬と祐介にどこかで聞いたような黄色い声が出迎えた。

祐介「ん…？　あ……」

声の主は昨日龍馬たちが助けた女子高生二人組だった。偶然にも同じクラスだったのだ。

女子高生1「おはよー！」

龍馬「あれ、二人とも同じクラスだったの？」

女子高生2「なんかそうみたいなのぉ～♪　あ、てか、昨日はありがとね」

龍馬「あ、あぁ、いいのよあれぐらい」

女子高生1「あの後大丈夫だった？」

祐介「う、うん。まぁね（＾＾；」

女子高生2「あ、おはよ～！」

突然、女子高生2が龍馬と祐介の背後に向かってまた黄色い声で手を振りながらあいさつをした。延彦が登校してきたのだ。

龍馬「あ、山崎くん」

延彦「おう……あれ？」

延彦も女子高生二人組に気づいて立ち止まった。

延彦「ビックリした～、二人とも同じクラス？」

祐介「なんかね、そうみたい」

女子高生1「三人とも昨日はありがとう。助かったよ」

延彦「あぁ、別にいいって」

女子高生2「キミらが来なかったらウチらマジでやばかったよね」

女子高生1「うん。あの人たちすごく強引なんだもん」

龍馬「いや、オレから見てもあれはヘタクソなナンパだと思う」

女子高生1「だよねー！」
祐介「てか、お前ナンパしたことねーじゃん」
龍馬「……」
龍馬は少しだけ赤面した。延彦と女子高生二人組に笑いが起こる。
女子高生2「てゆーかさぁ、キミら上加中（かみかちゅう）の沢村くんと佐山くんだよね？」
龍馬と祐介は一瞬驚いた。自己紹介もしていないのにどうして自分の名前を知っているのか。しかも出身中学校まで。
龍馬「そうだけど……何で知ってんの？」
女子高生2「ウチら氷川中の女バス（女子バスケットボール部の略）にいたの。そんでキミらのことしょっちゅう大会で見かけてたから」
女子高生1「二人とも去年の夏の大会で優秀選手賞とってたよね？」
祐介「うん、とったとった」
女子高生1「ウチら、上加中の試合は結構観てて、もうみんな釘づけだったよ」
龍馬「おいマジかよぉ！　なんか嬉しいなー（＾０＾）」
一瞬にして舞い上がる龍馬。
　龍馬と祐介は、さいたま市立上加中学校のバスケットボール部に所属していた。実力もかなりのものだったので、二人は常にレギュラーでスターティングメンバーに起用されていた。昨年の夏に行われたさいたま市の大会では、チームを準優勝にまで導いたほどだ。
延彦「なんだ、お前らバスケ部だったのか。だけどすげーなー」
女子高生1「ね！　すごいよね」
女子高生2「でも、決勝で大和田中に負けちゃったのは惜しかったね」
大和田中とは、上加中が夏の大会の決勝戦で戦った学校である。
祐介「あぁ、あれねぇ」
龍馬「外山（とやま）と長谷川にやられちゃったよな」
女子高生1「そーいえば外山くんも南陽入ったんだよ」
龍馬「え、マジ？　何組？」

女子高生1「確か…7組だったよ」
龍馬「そうかぁ……」
言うと、龍馬は遠い目をし、何気なく窓の外に目をやった。
女子高生2「ねぇ、名前何ていうのー？」
女子高生2が突然話を変え、延彦に名前を尋ねた。
延彦「オ、オレは山崎…だけど」
不意をつかれた延彦は、少し戸惑いながら答えた。
龍馬「強引に話変えるなぁ～あんた」
女子高生2「だってせっかく知り合ったんだもん、名前聞いとかないと」
祐介「てか、オレら、二人の名前をまだ聞いてなかったよね」
女子高生2「あ、ウチらの？」
女子高生1「そーいえば自己紹介してなかったね（＾＾ゞ　あたしは松嶋美穂（まつしま みほ）。呼ぶ時は“美穂”でいいよ☆」
女子高生2「あたしは明子（ほんじょうあきこ）。本上明子。ごめんね、先に名前教えなくて」
龍馬「いいのよー（ー｀）」
　そうこう談笑しているうちに始業のチャイムが鳴り、ほぼ同じタイミングで菜々子が教室に滑り込んできた。
菜々子「おはようございます！」
まず菜々子は出席をとってから、今日の予定を告げた。
菜々子「えー、今日は校内見学をして、それの後にここでホームルームをやって、みんなはそれで終わりです。まぁ、だいたい11時半には終わるかと思います」
　この学校では毎年、新入生に自分の学校をより知ってもらうために、学校内の構造がどうなっているかを見学させている。
菜々子「…というわけで、みんなは指示があるまで教室で待機していて下さいね。あ、それから沢村くんと佐山くん、それに山崎くん、見学が終わったら職員室まで来てくれる？」
そう言い残して、菜々子は職員室へと戻っていった。龍馬と祐介、

延彦はやはり、といった感じで顔を見合わせた。
祐介「バックレるか？」
龍馬「バカ言うな。入学早々美人教師に近づけるチャンスだぜ？
何でバックレんだよ」
祐介「ははは。バカはどっちだよ」

龍馬「失礼しまーす……」
龍馬はゆっくりと職員室のドアを開けた。
祐介「げっ」
菜々子はすでに龍馬たちを待ち構えていた。自分の席で腕組みをしながらこちらを見ている。
延彦「向こうは準備万端だな」
龍馬「ちょっと張り切りすぎじゃねーの…？」
龍馬は苦笑いを浮かべた。しかし菜々子は早くこっちへ来いという目でこちらを見続けている。しぶしぶ龍馬たちは奈々子の席へと歩み寄った。
菜々子「…キミたち、昨日あそこで何してたの？」
祐介「あそこ？　あそこって、どこ？」
龍馬「さぁ……」
龍馬と延彦はとぼけて首をかしげる。ふざけて龍馬が自分の股間を指差して見せた。
祐介「あっ、そっちのあそこか！」
菜々子「バカなこと言ってないで答えなさい！（＊、´＊）　あのゲームセンターの前で何してたのよ！」
龍馬「今“あそこ”に過剰反応したな。やっぱエロいんじゃねぇ～？（^▽^）」
菜々子「何言ってんのよ！　あなたが変な所指差すからでしょ！」
龍馬「そんなのいちいち拾わずに流せばいいじゃんか」
菜々子「だって、目の前でやられたら誰だって反応しちゃうでしょ」
菜々子もムキになって応戦してきた。

龍馬「何でそこで反応しちゃうのよ～。まるでオレがセクハラしてるみたいじゃ～ん。もしかして“ごぶさた”とか？」
菜々子「関係ないでしょ！　何てこと言うのよ！」
龍馬「じょ、冗談だよ。そんなに怒るなよナナコちゃん」
菜々子「ナ、ナナコちゃん！？　何よその親しげな呼び方！」
菜々子は今、完全に龍馬におちょくられていると感じていた。そうでなければ初めからちゃん付けで呼ばれることはないだろう。
祐介「でも、“あそこ”で過剰反応するのは怪しいよな」
龍馬「まったくだ」
祐介「だけど、レディーに向かって“ごぶさた”はねーよ」
龍馬「え？　だって……」
菜々子「そうよ！　ふざけるのもいい加減にしなさいよ！」
菜々子の苛立ちも限界に達した。そんな菜々子の目を見た祐介が、まだ何か言いたげな龍馬を制し、ずいっと一歩前へ出た。
祐介「オレらは普通にゲームをしてたよ。別に悪いことじゃないでしょ？　午後6時前に帰れば何の問題もない」
祐介はそれ以上語らず、ただじっと菜々子を見据えていた。菜々子も祐介の目から何を感じたのかはわからないが、それ以上の詮索はしてこなかった。
菜々子「…わかったわ。キミらを信じるよ。ただ沢村くん、あんまり大人をからかうのはやめなさい」
龍馬「はーい」
面白くなさそうに返事する龍馬。そして龍馬は誰よりも早く踵を返した。祐介と延彦もそれに続く。

放課後、帰ろうとしていた龍馬たちの所に少し心配そうな顔をした美穂と明子がやって来た。
美穂「ねぇ、さっき先生に何で呼ばれたの？」
祐介「え？　いや、たいしたことじゃないよ」
明子「ウソ。昨日のことチクられたんでしょ？」

龍馬「い、いや、ホントにたいしたことないって」
龍馬は慌ててごまかす。
明子「ふーん……だったらいいけどさ」
明子や美穂から心配そうな表情が消えた。
美穂「ねぇねぇ、沢村くんと佐山くんは高校でもバスケやるの？」
この時期特有の、入りたい部活動の話だ。
龍馬「バスケねぇ…オレら高校でバスケはやらないつもりなんだ」
美穂「え？　やんないの？」
明子「もったいなーい！　キミらが入れば絶対強くなるのに」
祐介「そうなんだけどね…。でも別にやりたいことがあるから」
延彦「何やるの？」
龍馬「…バンド！」
美穂「え？　バンド？」
明子「マジで？　何か楽器とかできるの？」
龍馬「オレはギターとボーカルで、ユースケはベース」
延彦「マジ？　実はオレも軽音入ろうと思ってたんだよ」
祐介「山崎くん楽器何できんの？」
延彦「ドラム」
祐介「ホント？」
美穂&明子「えー！　すごーい！」
龍馬「すっげー偶然。もうバンド組めるじゃん」
祐介「音楽何聴いてる？」
延彦「んー…パンクとかヘヴィ・ロックかな」
祐介「おぉ！　オレもだよ！」
龍馬「オレも聴くぞ！」
美穂「すごい…」
明子「好みもそっくりだなんて」
龍馬「じゃあ決定だな」
祐介も延彦も異論はなかった。バンド結成の瞬間なんて、案外こういう感じなのかもしれない。

明子「でもさぁ、何でバンドやろうと思ったの？」
延彦「オレは、中２の時にドラム始めたんだけど、せっかくやってんだったらバンドでも組もうかなって思って」
祐介「オレは近所にミュージシャン志望の人がいて、よくその人ん家に遊びに行ってベース弾かせてもらってたんだ。そんで中２の終わり頃にリョウも来るようになって、３人でよく楽器いじって遊んでたよ」
龍馬「そうそう。その頃からオレはギターを弾き始めたんだよな。その人ギターもベースもうまかったもんな」
美穂「それでバンドやろうって？」
龍馬「いや、その時はまだ遊び程度にしか思ってなかったんだ。去年の夏休み、オレらが部活引退した直後なんだけど、そのミュージシャン志望の人がオレとユースケをライブに連れてってくれたんだ。なんでもその人の高校時代の後輩が出るっていうんで。どんなもんかと思って観てみたら、これがもうすごいのなんのって！」
龍馬の目が輝き出した。
美穂「どうだったの？」
龍馬「いやもう、一言でいえばカッコイイ！　オレはライブを観るのはその時が初めてだったんだけど、みんな楽器を自在に操ってて意のままに自分を表現してて、それでいて演奏もうまくて……なんつーか、光ってたんだよね。たった数人の力で多くの人間の心を動かせるのかと思うと、なんだか無性にバンドがやりたくなってきちゃってさ」
祐介「そう。それでこいつ“オレはバンドでボーカルやる！”なんて言い出しちゃって」
龍馬「あぁ。あの時ボーカルの人にいちばん引きつけられちゃったんだよね（＾＾；」
美穂「へぇ～。相当カッコよかったんだね、その人」
龍馬「ああ。すげー人だよ。だからオレらは絶対南陽に入ろうと思ったんだ」

明子「何で？　バンドだったら他の高校でもできるじゃない？」
龍馬「実はそのバンドの人たちはここの軽音楽部だったんだよ。あの時で2年っつってたから、今は3年だ」
明子「マジで？　すごい偶然だね！」
龍馬「だろ？　だからここの軽音楽部に入ろうと決めたってわけ」
美穂「なるほどねぇ～。じゃあバンド頑張らないとね！　ちょうどメンバーもいることだし」
龍馬「あぁ、そうだね！」
延彦「じゃあさ、今から軽音の部室へ行ってみない？　早いとこ入部届出しちゃおうぜ」
祐介「そうだな」
龍馬たちは軽音楽部の部室へ向かうため教室を出ようとした。だが……。
龍馬「…てか、部室ってどこにあるの？」
祐介「……」
延彦「……」
みんな部室の場所を知らなかった。
龍馬「どうする…？」
祐介「あっ、そうだ、どっかに軽音楽部のビラが貼ってあんだろ。それ見れば場所が書いてあるんじゃねぇ？」
この時期はどこの部もこぞって新入生勧誘のためのビラを校内の至る場所に張り出す。
龍馬「なるほどな。んじゃビラを探そう」
龍馬たちは教室を出た。

しかし、彼らの背後で話を盗み聞きする者がいた。昨日ゲームセンターでもめた上級生・男1だった。男1は携帯電話を取り出し、ボス格の男3に連絡した。
男1「金谷、あいつらが動き出したぞ」
金谷とは男3の名前である。

金谷『どこに向かってる？』
男１「なんか、軽音の部室行くって言ってたぞ」
金谷『軽音？』
男１「でも、部室がどこにあるかわかんねーみてーだぜ。今ビラを探しに行った」
金谷『あぁ、そのビラを見て場所を確かめようってんだな』
男１「だろうね。で、どうする？」
金谷『そうだな……』

自分たちに不吉な影が忍び寄っているとは露知らず、龍馬たちは軽音楽部のビラを探していた。
龍馬「あったか？」
祐介「いや、ない」
壁には掲示物がたくさんあり、ビラを見つけるのは面倒な作業だった。
明子「なんかいっぱい貼り紙してあるからわかんないね～」
そんなことを言いながら探していると、美穂がそれらしきものを見つけたようで、龍馬たちを呼び寄せた。
美穂「ねぇ、これじゃない？」
その貼り紙には次のようなことが書かれていた。

軽音楽部　新入部員募集！
音楽をこよなく愛する人、バンドをやってみたい人、女の子にモテたい人
…などなど、軽音楽部に入りたい人集まれ！
初心者大歓迎！！　初めはみんな初心者です。心優しい先輩たちがしっかり教えてくれます。
場所は校舎１階の一番西側・隣に美術室とかがある所だよ！
毎週水曜日はミーティング！
それ以外の曜日でも誰かしらいるので気軽にどうぞ！

最高のステージを、あなたに約束します。

龍馬「これだ！」

延彦「１階のいちばん西側か」

龍馬たちは軽音楽部の部室に向かって歩き出した。龍馬・祐介・延彦の三人は胸を躍らせながら先を歩く。その後を美穂と明子が続いて歩く形になった。だが、前の三人はだんだんテンションが上がってきたせいか、歩行速度が次第に上がっていった。そのため必然的に美穂と明子との距離が遠くなっていった。

美穂「も～、歩くの早いよぉ～」

もはやそんな声も龍馬たちには聞こえていない。明子が「まったく、しょうがないねぇ」と言おうとしたその時だった。

目の前にあった教室の出入り口の陰に隠れていた二人組の男が突然、美穂と明子の前に躍り出た。美穂と明子は不意をつかれたため声が出なかった。二人のうち一人は覚えている。昨日自分たちを引っかけようとした男１だ。もう一人はわからない。すかさず男１が美穂の左腕をつかむ。

美穂「きゃあ！」

美穂の悲鳴に反応し、龍馬・祐介・延彦の三人がいっせいに後ろを振り返った。美穂と明子が男たちに拘束されている。

龍馬「お前は……」

男１「“お前”じゃねーだろ！　誰にクチ聞いてんだ！」

龍馬「ケッ、まーた先輩ぶってやがる。つーかよ、それ何のマネだ？　まさか刑事ドラマごっこじゃねーよな？」

男１「くぅぅ……なめやがって！　ちょっとツラ貸せ！　先輩としててめーらを指導してやる！」

祐介「あぁ？　指導だぁ？」

男１「こいつらがどうなってもいいのか！」

男１が、つかんでいた美穂の左腕を強引に自分のもとへ引き寄せる。

美穂「あぁっ！」

美穂の顔が痛みで歪む。
龍馬「…くそっ、わかったよ。ちょっとだけつきあってやるよ。だから乱暴はよせ」
男1「よ…よーし、それでいいんだ。ついて来い！」
男たちは美穂と明子を捕まえたまま歩き出した。

Track 1：START TODAY？

龍馬達は人目のつかない校舎裏まで連れて行かれた。周りには古くなり使われなくなった倉庫がある。
行くと、古ぼけた倉庫の中から背が高く体格のよい男、金谷が出てきた。続いて男2も現れた。金谷は龍馬達をなめ回すように見た後、龍馬をにらみつけた。
金谷「よう、また会ったな」
龍馬「オレは会いたくなかったけどな」
祐介「彼女達を盾にしてオレらをこんな所へ連れて来るなんて、随分と知恵を絞ったんじゃないの？」
見下すような目つきで、祐介は金谷達をにらみ返した。
男1「てめぇ！」
延彦「しかし、やりかたがベタすぎる。もっとマシな方法なかったもんかね」
龍馬「同感」
男2「このヤロウ！　タダじゃおかねーぞ！」
龍馬「じゃあ金でも払えば助けてくれんの？」
わざととぼけたことを言う龍馬。
祐介「払う気ないくせにそーゆーこと言うなって。こいつら真に受けるぞ」
祐介のツッコミ。
金谷「真に受けるわけねーだろバカヤロー！　もとからおめーらをタダで帰すつもりなんかねーよ！」
美穂と明子は恐怖でさらに体を強張らせる。
ほんの何秒か、間ができた。その時男2が素早く金谷に駆け寄って耳打ちした。
男2「おい、あいつもしかして……」
金谷「ん…？」

男2「そうじゃねぇ？」
金谷「間違いねぇな」
小声でやりとりする二人を延彦が不審に思った。
延彦「おい、何二人でコソコソしゃべってんだ！」
金谷と男2が延彦を見た。
金谷「おいお前、もしかして東遊馬中（ひがしあすま）の山崎か？」
延彦「……ああ、そうだ」
男2「はっはーっ！　やっぱりそうだった！」
男2は捜し物を見つけたかのような叫び声をあげた。
龍馬「えっ、東遊馬中？」
祐介「東遊馬中っていや、あの悪名高いことで有名な…？」
　延彦のいた東遊馬中は、悪名高いことで有名だった。大宮地区で起こる万引きや恐喝、傷害事件の1～2割は東遊馬中の生徒によるものだった。学校のあるさいたま市西区の住民が頭を悩ますほどである。また、学校内での暴力事件も多発している。リンチやいじめなどは日常茶飯事であった。そんな治安の悪い学校に通っていたのだから、ケンカも当然のことながらしょっちゅうやった。自分の名前が校外の人間に知れてしまうのもおかしくない。男2に素性を知られても延彦は特に驚きはしなかった。
延彦「ああ。あの東遊馬中だ」
金谷「お前、ちょっとは名が知れてるぜ。オレの後輩でもお前らにやられたヤツがいるからな」
延彦「フン、だったら何だってんだ」
金谷「上には上がいるってことを教えてやるよ。おとなしく高校生活を送るんだな。オレの子分になるってんなら考え直してやってもいいけど？」
男1と男2がケラケラ笑う。
男1「他の二人は残念ながら無名だけどな！　見たことも聞いたこともねーぜ！」
男1が龍馬と祐介を嘲笑するように言った。

祐介「は？」
龍馬「それオレらに言ってんのか？」
男１「あたりめーだんべ！　他に誰がいんだよ！」
龍馬と祐介は互いの顔を見合わせ、同時にため息をついた。
延彦「“だんべ”って。どこの言葉だよ」
男１「あぁ！？　てめー熊谷弁なめんなよ！」
埼玉県の北部や西部地方では、『～だろう』を『～だんべ』という。
祐介「リョウ、オレこいつぶっとばしてもいいか？　我慢の限界なんだけど」
龍馬「ああ、いいよ。オレはあのでかいヤツをやる。卑怯なことしてふんぞり返ってるヤツ見ると腹が立ってしょうがない！」
祐介「ＯＫ。お前は昔からそういう性格だもんな」
龍馬「山崎くん、いいだろ？」
延彦「構わないよ。こいつらたいしたヤツじゃなさそうだし」
男２「あぁ？　誰がたいしたことねーだと！」
延彦「あ、それからな、オレお前らの子分になる気は全然ないから。まぁ、さっきのは冗談で言ったんだろうけど」
金谷「く……」
龍馬「あれ？　もしかして本気でオレらを子分にしようと思ってた？」
祐介「いや、ありえない話じゃねーぞ。こいつら思考回路がいたって単純だし」
龍馬「だよなぁ……やっぱありうる話だよな」
男１「おい、てめーらさっきから言いてーことばっか言いやがって！」
男１が祐介の左肩を右手でつかみ、ムリヤリ自分の方へ引き摺り回そうとした。しかし祐介が男１の手を左手で勢いよく払う。
男１「なんだよ、マジでオレらとやる気か！」
祐介「ギャーギャーうるせーヤローだな。おい、リョウ」
龍馬「……ああ、わかってる。ＭＣはもう終わりだ。さっさとやっ

ちまうか」
金谷「てめぇ……！」
金谷が龍馬に向かって突進してきた。
龍馬「あたぁ！！」
龍馬の強烈な右フック！
男1「か、金谷！」
男1・2はビックリして固まってしまった。
祐介「おい、どこ見てんだよ」
気がつくと、祐介が男1に接近し、やや前屈みになり背の低い男1に自分の目線を合わせながら薄ら笑いを浮かべていた。
男1「て、てめぇ！」
なめられたと思い、男1は祐介に殴りかかった。だが、男1のパンチは空を切った。
前傾姿勢のまま男1のパンチをかわした祐介は、そのまま一歩前に踏み込み、右のストレートパンチを見舞った。男1は何歩か後ろによろめき、尻餅をついた。
祐介「おい、まだやれるだろ？」
　そんな龍馬や祐介の攻撃を見て、延彦もまたニヤリと笑った。
延彦「やるなあいつら」
男2「く、くそがぁ！」
男2が延彦に襲いかかってきた。半分やけになっているのが表情から読み取れる。逆に延彦も素早く間合いをつめた。
　間髪入れず、延彦のエルボー・バット（肘打ち）！
男2「うぐぅっ……」
男2が左頬骨の辺りを押さえ、ヒザをついた。延彦は、それをただ上からにらみつけていた。
明子「ウソォ…三人とも強くない？」
美穂「うん…すごいね」
美穂と明子も驚いていた。
　明子の言葉に反応したのか、金谷がよろめきながら立ち上がった。

先程の一撃で唇が切れている。
金谷「ぐうっ……こ、このヤロウ……ふざけたかけ声出しやがって……」
龍馬「かけ声？」
金谷「何が“あたぁ”だ…！　バカかてめぇ！」
龍馬「何だと！　てめぇ、ブルース・リーをバカにすんなよ！」
金谷「はぁ？」
龍馬は映画のブルース・リーと同じように構えた。彼はリーのファンだったのだ。今、龍馬の頭の中では『燃えよドラゴン』のテーマが流れている。

金谷「な、何がブルース・リーだ！　笑わせんな！」
金谷がパンチを仕掛けてきた。
龍馬「はいっ！」
龍馬の裏拳打ち！
金谷「ぐっ！」
カウンター気味に金谷の鼻先をとらえる！
龍馬「どうした、さっきまでの勢いは？　オレらを子分にするんじゃなかったの？」
金谷「くそ……」
　延彦にヒジ打ちをくらった男2はようやく立ち上がった。が、延彦がこちらを見ていない。龍馬と金谷の戦いを観戦していたのだ。
延彦「強いな、沢村くん」
男2「おい山崎！」
延彦「あ？　気安く呼び捨てにすんなよ」
男2「てめー相手がここにいんのにシカトこいてんじゃねーぞ」
延彦「あー悪かった。さっきのヒジ打ちでてっきり終わったと思ってたよ。案外タフだったみたいだな」
男2「なにぃ！？」
延彦「ぶっちゃけちょっとビビッてんじゃねぇ？　こんなはずじゃ

なかったって思ってんだろ？」
男2「そ、そんなことあるかぁ！」
男2はムキになって反論した。実は図星だったのだ。
延彦「あ、そう。じゃあオレを倒してみれば？」
男2「なめんなぁー！」
男2が延彦に殴りかかった。
「ガッ！」
パンチをくらい、延彦は半歩後ろにさがった。延彦はツバを吐き、男2に向き直る。
延彦「…やっぱこんなもんか」
ニヤリと笑う延彦。男2の恐怖感はこの瞬間増大した。延彦がパンチを仕掛けてきたが、体が動こうとしなかった。
延彦のナックル・アロー！（弓を射るようなフォームのパンチ）

見事なまでの豪快なパンチだった。男2は大の字になって倒れた。
金谷「ちくしょう…！」
追いつめられた金谷がやぶれかぶれで突進してきた。しかしどの攻撃も龍馬には当たらない。
金谷「くそがぁ！」
金谷のストレート！　しかし、龍馬が左足でのヒザ蹴りをカウンターであわせる！
金谷「はぐぅっ…！」
金谷の体がくの字に折れ曲がった。今度は龍馬から仕掛けていった。
金谷「！！」
龍馬「ほわたぁー！」
龍馬の中段への後ろ回し蹴り！
「ドスッ！！」
これまた豪快な蹴りだった。みぞおちを蹴られた金谷は勢いよく吹っ飛び、後ろにあったガラクタの山に突っ込んだ。
龍馬「決まったぜ、必殺“水月殺し（すいげつごろ）”！」

水月（すいげつ）とはみぞおちのこと。龍馬は相手のみぞおちを狙って後ろ回し蹴り（もしくは後ろ蹴り）を放つのが得意だったのだ。おそらく“水月殺し”は龍馬自身が命名したものだろう。一方の金谷はガラクタに突っ込んだまま起き上がってこない。ノックアウトしたようだ。

龍馬「ケッ、小者がでしゃばりやがって」

祐介が相手をしていた男1は、意識は戻ったものの祐介の右ストレートをくらってすでに戦意を喪失していた。金谷と男2がやられるのをただ見ているだけだった。

男1「マ、マジかよ…」

現実を目の当たりにして、男1はうわ言のように「マジかよ」と繰り返していた。そんな彼を見て、祐介が言う。

祐介「まだやるつもりか？」

男1は無言のまま祐介を見た。祐介の周りには、戦いを終えた龍馬と延彦もいる。

延彦「あいつらはもう立てねーよ」

龍馬「もうやめといたほうが身のためだぜ？　お前らの負けだ。早くあの二人を連れて帰れよ」

男1は何も言い返さなかった。何も言い返せなかったのだ。

祐介「じゃ、帰るか」

龍馬「おう」

延彦「そうだな」

龍馬たちはその場を後にした。

美穂「ねぇ、キミら強いんだね！」

帰り際、龍馬たちの意外な一面を見た美穂と明子が一瞬でアイドルのファンになったように目を輝かせていた。

龍馬「え？　そう？　あいつらが弱すぎたんじゃない？」

龍馬は照れ臭さから、わざととぼけてみせた。

延彦「いや、二人とも強かったぞ。あの動きを見てる限りじゃ何か格闘技とかやってんじゃねーかなって思うんだけど、違う？」

祐介「あ、わかった？」

龍馬「オレら昔から空手習ってんだよ」
延彦「やっぱりな」
美穂「えっ、そーなの？」
明子「すごいね！　バスケの他に空手もできるんだ！」
龍馬と祐介は以前から地元の空手道場に通っていたのだ。ケンカでは無名でも戦いに慣れているのはそのためである。
祐介「山崎くんも強かったけど、何か格闘技は？」
延彦「いや、オレは何も。我流ってヤツかな」
祐介「そうなんだ。だけど強かったなぁ」
美穂「てか、沢村くんはブルース・リーが好きなの？」
龍馬「おう！　格闘技ではオレの憧れなんだ！」
延彦「だけど、攻撃する時に“あたぁ！”はねーよ」
祐介「お前の悪いクセだよ」
明子「かなりモノマネ入ってたよね」
龍馬「みんな何言ってんの！　ブルース・リーはだな――」
言いかけて、龍馬は足を止めた。祐介と延彦が龍馬の見る方向に顔を向ける。誰かがこちらに向かって歩いてくる。
延彦「あ！」
歩いてきたのは担任の菜々子だった。先程金谷がガラクタに突っ込んだ音を聞いて様子を見に来たのだ。
祐介「やばい！　ナナコちゃんだ！」
菜々子は物音を聞いた方向から龍馬たちが歩いてくるのを見て不審に思った。
菜々子「ちょっと、キミたち何やってんの？」
龍馬「あ、いやぁ、ちょっと……」
菜々子「ちょっと何よ？」
龍馬「軽音部の見学に……なぁ？」
祐介「あ、あぁ。そうなんだよ」
必死にごまかす龍馬たち。菜々子は腕を組み、仁王立ちになった。
菜々子「…軽音部は今新入生歓迎ライブで忙しいの。今日は誰も部

室にはいないはずよ」
龍馬たちの頭は真っ白になった。もうごまかしようがない。
菜々子「どこに行こうとしてたの？」
困った。どう切り抜けるか。
龍馬「あ！　電車乗り遅れちゃう！　今日ドラマの再放送観るんだった！」
しらじらしく龍馬が大声を張り上げた。
祐介「お、じゃあ早く行かないと！」
菜々子「は？」
明子「そうね！　ウチらも用事あるんだった！　ねぇ美穂！」
美穂「う、うん！」
延彦「オレは友達の家にパワプロやりに行くんだった」
龍馬「そーゆーことなので！　じゃあね！」
言い残して、龍馬たちはいっせいに駆け出した。菜々子も後を追う。
菜々子「待ちなさい！　キミたち電車通学じゃないでしょー！」
龍馬「くそーっ！　とにかく逃げろー！」
菜々子に追いつかれまいと懸命に走る龍馬たち。まるでルパン三世と銭形警部のような追いかけっこだ。果たしてこれがいつまで続くのやら……。

入学早々いきなりトラブルに見舞われた龍馬たちだったが、とにかく彼らの高校生活はまだ始まったばかり。今後も刺激たっぷりな高校生活を体験することになるのを、まだ彼らは知る由もない……。

Track 1：START TODAY？（後書き）

Track 2もお楽しみに！

Track 2：Punk Rock High School？

龍馬たちが県立南陽高校に入学してから1週間が過ぎた。この頃になると、クラスの生徒たちは仲良しのグループでまとまり始める。龍馬と祐介は、先日の金谷たちとの一件をきっかけに延彦や美穂、明子とすっかりうちとけた。特に延彦とは行動を共にするようになった。

龍馬「ダメだ、スタジオ今日満員だってよ」

学校での休み時間、携帯電話を握ったままの龍馬が残念そうな顔で祐介と延彦を見た。

今日、彼らはリハーサルスタジオでバンド練習をするつもりだった。そのために楽器を各自持参してきていた。しかし、それがダメとなると龍馬たちのテンションが急降下するとともに、せっかく持ってきた楽器もただの荷物と化してしまうのである。

延彦「うーむ、やっぱり今日の今日じゃ空いてないか……」

祐介「みたいだな…。でも、せっかく楽器持ってきたのに何もしないで帰るのはやだなぁ」

延彦「そーだなぁ……」

無言になる3人。その沈黙を破ったのは龍馬だった。

龍馬「あのさぁ、軽音楽部の部室へ行けば練習できるんじゃねぇ？

あそこなら機材が揃ってるはずじゃん」

祐介「まぁ、そりゃそうだろうけど、勝手に機材とか使うわけにはいかねーよ」

龍馬「今日入部届を出すんだよ。そしたら部室使えるだろ？」

延彦「ちょっと厚かましいかもしれないけどね」

龍馬「大丈夫だよ。オレとユースケは軽音部の3年と顔見知りなんだから」

祐介「…ってもライブでちょっと話した程度じゃん」

龍馬「それでも、オレらの猛烈なやる気をアピールするためにも行

く価値はあると思う！」
延彦「やる気ねぇ…」
少し違うような気がしたが、あえて延彦はそこをつっこまなかった。
龍馬「お前ら1日でも早く入部したいだろ？」
祐介「まぁ、そうだね」
おそらく祐介も延彦と同じことを感じたであろうが、彼の場合はすでに慣れっこだった。
龍馬「じゃあ、決まりだ！」
　そんなわけで、龍馬たちは放課後に軽音楽部の部室へ行くことになったのである。祐介も延彦も、軽音楽部に入りたいという気持ちはあったので基本的に異論はなかった。ただ、入部届を出していきなり練習させてくれなんて頼んで、部の先輩たちにマイナスイメージを与えないか少し不安だった。

　放課後になった。龍馬たちは軽音楽部の部室前に立っている。美穂と明子もついて来た。部室にはまだ誰も来ていないようだ。
美穂「誰もいないみたいよ」
龍馬「来るのが早すぎたかな？」
延彦「そんなことはないと思うけど…」
祐介「もう少し待とうぜ」
言いながら、祐介はベースを肩から下ろし、ゆっくりと床に置いた。
　その時、龍馬たちの背後から女子生徒の声が響いてきた。
　振り返ると、2人の上級生らしき女子生徒がこちらを見ながら早足でやって来る。
女子生徒1「あっ、新入生じゃない？」
と、小柄でボブカットの女子生徒1が期待感いっぱいに声を張り上げた。
女子生徒2「なんか楽器持ってるよ」
少し驚き気味に、中肉中背でセミロングの女子生徒2も期待に胸を膨らます。

祐介「あの人たち、部の先輩かな」
延彦「うん、それっぽいな」
女子生徒1「ねぇ、キミら1年生？」
龍馬「あ、はい」
女子生徒1「もしかして入部希望？」
龍馬「あ、はい」
龍馬はいささかそっけない調子で返事をした。
祐介（こいつ照れてるな…）
女子生徒2はそんな龍馬に気づく由もなく、さっと制服のポケットから部室の鍵を取り出した。
女子生徒2「今部室の鍵を開けるからね。せっかく楽器持ってきたんだから何か演奏してみる？」
祐介「えっ？」
意外だった。まさか向こうから言われるとは思ってもいなかった。
龍馬「いいんすか？」
女子生徒1「全然ＯＫだよ！　見たところかなりやる気ありそうだもん」
龍馬の目論見通り（？）だった。
延彦（実行してみるもんだな…）
　女子生徒2がドアを開けた。部室は少し殺風景だが、普通の教室二つ分ぐらいの広さがある。壁は防音効果のあるものになっている。機材も思ったとおり一連のものが揃っている。ギターアンプにベースアンプ、ドラムセットやキーボード。練習するのに不自由はない。
祐介「おぉ、機材がひと通り揃ってる。これなら普通に練習できるじゃん」
女子生徒1「でしょ？　普段はバンド単位で順番に使ってるのよ」
龍馬「今日はどこのバンドも使わないんですか？」
女子生徒2「うん。新歓ライブ近いからみんなスタジオにこもってるんだ」
龍馬「新歓ライブ？」

女子生徒２「新入生歓迎ライブっていってね、毎年４月の２０日前後になると視聴覚教室を借りてライブをやるの。新入生の勧誘も兼ねてね。今年は２１日にあるよ」
龍馬「ふ～ん……だからかなぁ、今日スタジオ空いてなかったの」
女子生徒１「どこのスタジオ？」
龍馬「駅前の“ＢＬＡＣＫ　ＢＥＡＵＴＹ”ってトコですけど…」
女子生徒１「あぁ、あそこね。ウチってスタジオ入る時はほとんど“ＢＬＡＣＫ　ＢＥＡＵＴＹ”行くから」
女子生徒２「南陽軽音楽部御用達なの」
龍馬「そうだったんすか…」
女子生徒１「そうだ、キミらってどんな音楽聴くの？」
龍馬「えっと…パンクとかヘヴィ・ロックとかですね」
祐介「ハイスタとか、オレらその辺聴くんですよ」
女子生徒１「へぇー、そうなんだぁ。ウチはパンク好きな人多いんだよ」
龍馬「マジすか？」
女子生徒１「いっぱい友達できるかもね」
龍馬は誰の目から見てもわかるくらい、ワクワクした表情を見せた。
延彦「そういえば、先輩たちは今日スタジオへは行かないんですか？」
女子生徒１「いやぁ、今日ウチらちょっと用事あるから、ちょっとだけここで練習していこうかなって思って…」
延彦「あ、じゃあオレらが先に使っちゃダメですよね」
女子生徒２「あぁ、いいのいいの。まだ時間に余裕あるから。それよりもキミらの演奏聴いてみたいし」
龍馬「じゃあ、そういうことなら…」
龍馬はさも当たり前のようにギターをケースから出そうとした。
祐介「バカ！　少しは遠慮しろよ！」
女子生徒２「ふふふっ（＾＾）　ホントにいいって」
祐介「そーすか？　じゃあちょっとだけ…」

祐介が遠慮気味にベースをケースから取り出した頃には、龍馬はすでにギターのセッティングに入っていた。
祐介「子供かお前は」
延彦「まったく遠慮してないな」
女子生徒1「いいじゃん、やる気があって」
祐介「図々しいだけっすよ」
　祐介と延彦もセッティングにとりかかった。龍馬はすでに準備が完了している。
龍馬「2人ともまだぁ？」
祐介「ちょっと待ってろよ！」
延彦「お前早すぎだぞ」
龍馬に急かされて、祐介と延彦はもたつきながらセッティングを進めていた。2人とも内心は龍馬と同じぐらいのやる気があったため、はやる気持ちを抑えられなかったのだ。
女子生徒2「ねぇ、みんなはもうスタジオとかで練習してるの？」
龍馬「いや、今日初めて合わせるんですよ」
女子生徒2「そうかぁ、じゃあウチらが見てたらちょっと緊張しちゃうかな？」
龍馬「いや、大丈夫っすよ。これぐらいできないとバンドマンは務まらんです」
しかし、龍馬の表情は少し硬かった。
美穂「リョウちゃん、ちょっと緊張してない？」
祐介「お前、緊張してるのがバレバレだぞ」
龍馬「……」

　約5分後、祐介と延彦のセッティングが完了した。
祐介「いつでもいけるよ」
龍馬「何やるか？　初めて合わせるから簡単な曲がいいよな」
延彦「うーん……」
龍馬「じゃあ、ＧＲＥＥＮ　ＤＡＹは？」

延彦「あぁ、それいいね」
祐介「“Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｔｏ　Ｐａｒａｄｉｓｅ”なんてどうだ？」
延彦「おぉ、それいいな」
曲目は決まった。龍馬たちは楽器を手にぐっと身構えた。
初めて人前で演奏する龍馬に、一瞬緊張が走る。ＧＲＥＥＮ　ＤＡＹの“Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｔｏ　Ｐａｒａｄｉｓｅ”はギターから始まる曲だ。龍馬はその緊張を薙ぎ払うかのようにエレキギターをかき鳴らした。
龍馬「あっ」
いきなりコードを間違えた。祐介と延彦も演奏の手を止めた。
龍馬「わりぃ、いきなりコード間違えちゃった」
祐介「お前なぁ～…調子狂うじゃんかよ」
延彦も少し不満げに龍馬をにらむ。
龍馬「すまん！　じゃあ仕切り直し！」
再び３人は身構えた。
今度は頭から間違えることなく、スムーズにイントロから歌につなぐことができた。最初のミスで、いくらか緊張が解けたのかもしれない。
龍馬はギターヴォーカルに不慣れなせいか、ギター演奏面でところどころ小さなミスをするものの、歌声で充分美女２人にインパクトを与えていた。
祐介は初めて人前で演奏しているので少し硬くなっていたが、その表情はクールだった。ただでさえ鋭い目つきが更に鋭さを増し、自分の世界を創りあげていた。
延彦のドラミングはフィル・イン（※主にサビの前などにタカタカタカ～ッとドラムを連打する技術で、オカズとも呼ばれる）やバス・ドラムのキックパターンなど、細かいテクニックが多少不安に感じれらるものの、落ち着いていて力強いものだった。
美穂「カッコいいね」

明子「うん。カッコいい」
　途中で途切れることなく、龍馬たちは無事初演奏を終えた。２人の女子生徒は、初めての演奏とは思えないクオリティの高さに驚きそして感心していた。
女子生徒１「…ねぇ、キミらホントに初めて合わせたの？」
龍馬「そうですよ？」
女子生徒１「上手だよ！　初めてとは思えない」
龍馬「マジすか？」
女子生徒２「うん。それに歌もうまかったし」
龍馬「そ、そうすか？　実際たいしたことないっすよ！」
しかしその表情は見るからに嬉しそうだ。
祐介「お前そんなこと言っときながら思い切り照れてんじゃねーか」
案の定祐介につっこまれた。一同に小さな笑い声が起こる。
女子生徒２「ねぇ、もうちょっとやってよ！　なんかもっと聴きたくなっちゃった」
龍馬「いいっすよ！　喜んで！」
祐介「あーあ、すっかり気をよくしちゃってらぁ」
延彦「単純だな……」
　それから龍馬たちは３～４曲ＧＲＥＥＮ　ＤＡＹの曲を演奏した。演奏を続けるうちに、３人も少しずつではあるが雰囲気に慣れてきた。同時に、初めて部室に来ていきなりこんなに自分たちだけバンド演奏をしてよいのだろうかという空気が龍馬たちの間に流れ始めていた。
祐介「あ……そーいや２人とも時間大丈夫っすか？　そろそろ練習したほうがいいんじゃないすかね？　予定もあることだし」
女子生徒１「あ、うん、そうだね。そろそろウチらもやろうか」
女子生徒２「うん」
　龍馬たちが楽器を片付けようとした時だった。
　１人の男子生徒が部室にひょっこりと現れた。
　ダークブラウンに染まった頭髪を逆立ててはいるが、その顔立ち

は爽やかさの中にもどこか子供の純粋さを秘めたような雰囲気だった。そして体格は特に太っているわけでもなければやせているわけでもなく、龍馬たちと同じぐらいの背丈だった。
男子生徒「あれ？　もしかして1年生かな？」
女子生徒2「そうなの。入部希望なんだって」
龍馬「あ……」
その男を見た瞬間、龍馬と祐介の動きが止まった。
祐介「リョウ、あの人…」
祐介が龍馬に耳打ちする。
龍馬「…うん」
延彦「どうしたお前ら？」
先程とは明らかに様子が違うのを不思議に思う延彦。それにまったく気づく様子もなく、龍馬は一歩前へと出た。
龍馬「あ、あの……ケンさん…甲本健（こうもとけん）さんですよね？」
ケンと呼ばれたその男は、少し意外そうな顔をしながらも「そうだよ」とうなずいた。
女子生徒2「え…？　ケンと知り合い？」
健「いや……あ、待てよ、キミら確か去年の夏に浦和でライブやった時フミオさんに連れられて来てたよね？」
ちなみに“フミオ”とは、以前龍馬と祐介が延彦たちに話した、健たちより2歳上の先輩で祐介の家の近所に住むミュージシャンを志す人物の名前である。また、龍馬と祐介にギターとベースをそれぞれ教えた男でもあった。
龍馬「あ、はい、そうです！」
健「やっぱりそうか！　どっかで見た顔だなーって思ったんだよね。確か、リョウにユースケ…だったっけ？」
祐介「はい！」
龍馬「おぉ！　覚えててくれたんすか！　マジで感激っす！」
龍馬と祐介は喜びを露わにした。
女子生徒2「すごい嬉しそう…」

女子生徒1「でも、浦和でのライブに来てたっけ？」
健「覚えてないの？　あの時フミオさんが中学生を2人連れてきてたじゃん」
女子生徒1「うーん……思い出せないや（＾＾；」
健「あっそう…。まぁいいか！　とにかく、みんな入部希望なんだよね？　…てゆーかほぼ確実に入部するような感じだね」
龍馬「はい！　あのライブ観た時からここの軽音楽部入ろうって決めてたんで！」
健「マジで？」
女子生徒1「おぉ、すごいやる気だねぇ」
健「そーいや昨夜もフミオさんからメールがあって、“オレの弟子が2人入るからよろしく頼むわ”って頼まれちゃったんだよ」
そう言って健は照れ臭そうに笑った。内心元気が良くて自分に憧れる新入生が軽音楽部を訪ねてきてくれたことを嬉しく思っているのだ。
祐介「弟子って…フミ兄（にい）はオーバーだな」
龍馬「まぁまぁ、弟子には変わりねーって！」
健「ところで、2人はフミオさんから楽器を習ったんだって？　今GREEN　DAYやってたの聴いたけど、なかなかよかったぞ。ドラムもしっかりしてたしな」
延彦「あ、ありがとうございます」
延彦も恥ずかしそうに頭を軽く下げた。
健「キミ、名前は？　ドラムはいつから？」
延彦「自分は山崎です。ドラムは中2からやってます」
健「山崎くんかぁ。いや、力強くていいよ。ウチでもっとうまくなってってよ」
延彦「はい！」
健は軽く微笑むと、何かを思い出したように2人の女子生徒に向き直った。
健「おう、そーいや2人とも自己紹介したのか？」

女子生徒2「あっ、まだしてなかった！　ごめん！」
2人の女子生徒は慌てて背筋をピンと伸ばし、椅子に深く座り直した。
女子生徒1「あたしは岡部愛子（おかべ あいこ）。アイコって呼んでね」
女子生徒2「あたしはミチヨ、黒谷充代（くろたに みちよ）です。紹介が遅れてごめんね」
健「オレは甲本健。ケンでいいよ。改めてよろしくな」
龍馬「じゃあオレらも自己紹介しようか。オレは沢村龍馬です。上加中から来ました。リョウって呼ばれてます」
祐介「オレは佐山祐介です。リョウと同じ上加中から来ました。呼ぶ時はユースケでいいっす」
延彦「山崎延彦です。東遊馬中出身です。某刑事ドラマじゃないけど、ヤマさんって呼ばれてます。ちなみにオレら3人とも同じクラスです」
健「ははは、いいねぇヤマさんって」
龍馬「見た目はゴリさんみたいですけどね」
延彦「ほっとけよ（笑）」
愛子「ちなみにケンはウチの部長だから」
龍馬「じゃあボスって呼んでいいっすか？」
健「やめてくれ（笑）」
充代「あなたたちは？」
充代が美穂と明子に名を訪ねる。
美穂「あ、あたしは松嶋美穂といいます。氷川中の出身です」
明子「あたしは本上明子です。同じく氷川中の出身です」
充代「そう、よろしくね」
そう言って充代は微笑んだ。
明子「はい、よろしくお願いします」
　軽音楽部初来訪にして上級生とすっかり打ち解けた龍馬たち。彼らは誰一人として、この部室へ来たことを後悔していなかった。
健「あ、そうだ。明日オレのバンドが部室使うことになってんだけ

ど、よかったらリョウたちも来る？」
龍馬「え？　い、いいんですか？」
突然の誘いに動揺する龍馬。もちろんいい意味での動揺である。
健「いいよ。だって、これだけやる気のあるヤツらが来てくれたんだもん、なんだか一緒にセッションでもしたくなっちゃってさ」
龍馬「マ、マジすか～！？　もちろん行きます！　なぁ2人とも？」
祐介「ああ！　まさかケンさんが誘ってくれるとは思わなかった」
延彦「オレも喜んで行きます！」
健「そうか！　じゃあ決まりだな！」
　まったく想定していない誘いだった。すでに龍馬たちのテンションは上がり始めていた。

Track 2：Punk Rock High School？

翌日――。
龍馬たちは朝から上機嫌だった。特に龍馬のハイテンションぶりは誰の目から見ても明らかだった。
ムリもない話である。
中学時代から憧れていた人物からセッションの申し出を受けたのだから、胸が躍るのも当然だろう。
龍馬「フンフンフ～ン♪」
龍馬はずっと鼻歌を歌ったままだ。
美穂「リョウちゃん、見るからに嬉しそうだね」
美穂と明子は、そんな龍馬を微笑ましく見ている。
祐介「まったく、しょうがねーなぁ…。あいつは昔っからああなんだよ」
そう言うと、祐介はＴｈｅ Ｂｌｕｅ Ｈｅａｒｔｓの『情熱の薔薇』を口ずさむ龍馬のもとへ歩み寄った。
祐介「おいリョウ、嬉しさを体現しすぎだぞ。周りが引く前にやめとけ」
龍馬「いや、だってよぉ、あのケンさんがだよ、“一緒にセッションやろう”って言ってくれたんだぞ？　これが喜ばずにいられるかってんだ」
祐介「…そんな露骨に喜ばなくても、お前の気持ちは充分に伝わってるから大丈夫だよ」
龍馬「あ、そう？　それならいいんだけど」
祐介「何がいいんだよ。意味わかんねぇっての」
祐介にはわかっていた。龍馬はどうしても感情が表に出てしまうタイプの人間なのだ。そして龍馬には、時々露骨にその時の感情を体現してしまうクセがあることも充分に理解していた。しかし祐介は、その悪いクセを意識して直して欲しいと密かに願っていた。

一方、所変わってここは龍馬たちの憧れである健の教室。
自分の席でマンガを読んでいる健のもとに、充代と1人の巨漢がやってきた。
クセの強い短髪で少しハーフっぽい顔立ちをしたその巨漢が、軽く健の肩を叩く。やや驚きつつ、健が振り向く。
健「お、おぉ、ジュンか」
この男、健と同じ軽音楽部に所属し、なおかつ健とバンドを組んでいる桐田順一（きりたじゅんいち）である。現在、南陽高校でいちばん腕のたつドラマーだと言われている。力強いドラミングはその巨体から容易に想像できるが、実は細やかなテクニックも持ち合わせている。ちなみに、「順一」という名前から「ジュン」と呼ばれている。
桐田「ケン、聞いたぞ。また1年に将来有望な入部希望者が来たんだってな！」
健「おう、そうなんだよ。フミオさんの弟子だって」
桐田「フミオさんの弟子？　それどういうこと？」
健「いや、昨日は3人来たんだけど、うち2人はフミオさんから楽器を教えてもらったヤツらだったんだよ。だからなかなかうまかったぜ」
桐田「へぇ〜……」
充代「ギターヴォーカルの子は歌もうまかったしね」
桐田「ほーぉ。オレも会ってみてーな。そんでケン、お前今日そいつらとセッションやるんだって？」
健「あぁ。お前も一緒にやるか？」
桐田「うーん、そうだな。まずはそいつらの演奏を見てからにするよ」
「そうか」と健は微笑んだ。
桐田「しかし、今年の1年は楽しみだな。おとといも入部希望の1年が来たじゃん？　あいつらもなかなかのもんだったしな」
健「あ、そーいや来てたね。オレはバイトだったから途中で帰った

けど」
充代「え？　おとといも来たの？」
桐田「うん。あ、ミチヨはおとといスタジオだったから知らないんか。なんかさ、そいつらも中学から楽器いじってるみたいでさ、Ｈｉ－ＳＴＡＮＤＡＲＤやらせたらキマッてたんだよ」
桐田は興奮気味に、もうひと組の入部希望者について説明した。
健「うん、そいつらもなかなかのモンだったよな。そいつらも今日来るかな？」
桐田「それが今朝、楽器背負って学校来るの見かけたんだよ。十中八九来るよ、ありゃあ」
健「おぉ、やる気あるなぁ」

そして放課後。
帰りのショートホームルームを終えるやいなや、龍馬はクラスの誰よりも早く立ち上がり、ギターを素早く担ぎ上げて教室を飛び出していった。
祐介「お、おいリョウッ！　ちょっと待てよ！」
延彦「オレらを置いてく気かぁー！」
龍馬「だったら早くしろよ！　日が暮れちまうぞー！」
５メートルほど先から龍馬が大声で返事を投げ返す。
祐介「暮れるわけねーだろが！　まだ４時前だぞ！　そんな焦るな！」
慌ててベースを引きずりながら祐介が教室から出てきた。その後ろに続く延彦は、かばんが半開きになったままだ。
祐介「いいからそこで待ってろ！」
まるで幼稚園児を連れた父親である。龍馬は明らかに落ち着きのない様子で祐介と延彦が追いつくのを待っていた。
明子「リョウちゃん、ホントに嬉しそうだよね」
美穂「うん。まるで小さい子みたい」
美穂と明子はクスクス笑っていた。

龍馬たちが軽音楽部の部室へ着くと、すでに健と桐田、他のメンバーが集まっており、輪になって雑談をしていた。
龍馬「ちわーっす」
健「おう、来たか」
龍馬は目玉だけを動かし、桐田や他のメンバーをひと通り見回すと、軽く会釈をした。
桐田「えーと、もしかして昨日来たっていう1年生？」
龍馬「あ、はい！」
健「今日はオレとセッションするんだよな！」
龍馬「はい！　今日はよろしくお願いします！」
龍馬は改まって一礼した。
健「はっはっはっ。そんな固くならなくてもいいって。そんなことより、そんな入り口付近につっ立ってないでこっち来いよ」
健は部室の入り口で固まっている龍馬たちに手招きした。龍馬たちは緊張した面持ちで健たちの輪に混じっていった。
龍馬「失礼します……」
健「だからそんな緊張すんなって。昨日あんなに打ち解けてたのに！」
龍馬「あ、はい、すいません」
健たちに小さな笑いが起こる。
桐田「なんか変に礼儀正しいな（^^；　ところでみんなウチに激しく入部希望らしいね。名前何ていうの？」
龍馬「オレは沢村龍馬っていいます。1年4組です。ギターと歌をやりたいっす」
祐介「同じく、佐山祐介です。ベースやってます」
延彦「同じく、山崎延彦です。ドラムをやろうと思ってます」
龍馬たちが自己紹介を終えると、今度は桐田が態度を少し改めた。
桐田「オレは桐田。桐田順一です。ケンの後ろで太鼓叩いてるよ」
延彦「ドラムやってるんですか？」

桐田「一応ね」
健「ジュンのドラムはすごいよ。ウチの学校でいちばん力強いんだ」
延彦「そうなんですかぁ～…」
延彦の目が輝き始めた。
健「後で見せてもらえよ」
桐田「よせよケン。照れるじゃん」
健「何を照れてんだ。減るモンじゃねぇだろ。おう、そうだ、リョウたちにもみんなを紹介しなきゃな」
健は龍馬たちと一言も交わしていないギタリストとベーシストに自己紹介を促した。
健「じゃあ…ナミーから自己紹介！」
ナミーと呼ばれたその男は椅子から身を乗り出し、長い前髪をかき上げた。『スラムダンク』の流川楓より少し長いミディアムヘアで、若干やせた感じの男である。
ナミー（※以下南）「えーと、３年の南昌利（みなみまさとし）です。ギター担当してます。南だからナミーって呼ばれてます」
南はそれだけ言うと、照れ臭そうにベーシストの肩を軽く叩いた。
「早く自己紹介しろ」という意思表示らしい。おそらく口数が少ないタイプの人間なのだろう。
　以外にも早く話をふられたベーシストは、「しょうがないなぁ」と言わんばかりの笑顔を見せた。その笑顔は、龍馬たちに人懐っこい印象を与えていた。
ベーシスト「えー、ベースの小林雁之助（こばやしがんのすけ）です。雁之助なんて珍しいでしょ？　みんなからはガンちゃんって呼ばれてるよ」
雁之助は、『ＢＥＣＫ』の南竜介よりも少しクセが強い長い黒髪をダイナミックにかき上げながら軽く笑った。
健「みんな名前覚えたか？」
龍馬「はい。大丈夫っす」
健「ちなみにオレはこのバンドのボーカルです。バンド名は“ＴＨＥ　ＢＩＧ　ＢＯＳＳ”っていうんだ」

名前からしてレベルの高そうな感じがする。
龍馬「なんか、ものすごく強そうな名前っすね」
健「だろ？」
延彦「バンド名は“メタルギアソリッド”からですか？」
龍馬「いや、ブルース・リーの映画からだろう」
健「おっ、よくわかったなリョウ。お前の言うとおりだ」
延彦は「何でわかったんだ？」と言わんばかりの表情で龍馬を見た。
龍馬「やっぱり！　『ドラゴン危機一髪』の英語版タイトルですよね？」
健「そうそう！　もしかしてリョウもリーをリスペクトしてる人？」
龍馬「はい！　オレにとってリーは武術の神っす！」
健「キター！！　ここにも仲間がいたぞ！」
龍馬「オレも、まさかケンさんと趣味が同じだとは思わなかったっすー！」
かくして、男たちはブルース・リー好きという共通項を以って気持ちが通じ合ったのだった。
雁之助「ま、まさか、２人にこんな共通点があったとは……」
龍馬と健はしばらくブルース・リーの話題で盛り上がっていた。彼ら以外はみな、その空気に入っていくことができずにいた。
美穂「すごい…リョウちゃんって、ホントにブルース・リーが好きなのね」
明子「うん……」
　数分後、話が一瞬途切れたのを見計らって、桐田が違う話題を切り出した。
桐田「あのさぁ、ケンが言ってたんだけど、みんなフミオさんの弟子なんだって？」
延彦「あ、自分は違います。独学です」
龍馬と健も再び話の輪に戻ってきた。
健「独学であそこまで叩けりゃすげーと思うよ」
延彦「あ、そうですか？」

延彦は少し照れ笑いをした。
雁之助「ちょっと見てみたいな、みんなのプレイ。なぁ、ナミー」
南「うん…そうだね」
南は静かな口調で答えた。
　そうなると、場は必然的に龍馬たちが健たちの前で何かバンド演奏をしなければいけない空気になってくる。もっとも、龍馬たちには義務感のような精神的負担はないのだが。あるとすれば前日以上の緊張感だろうか。
龍馬「じゃあ…やりますか」
龍馬はサッと椅子から立ち上がり、エレキギターをソフトケースから取り出した。
祐介「なんだ、やる気マンマンだな」
祐介がそっと耳打ちする。
龍馬「何言ってんだ。お前だって同じだろ？」
言われて、祐介はニコリと微笑むだけだった。
　その時だった。
？「すいませーん、失礼しまぁーす」
少し控えめな男の声が部室に響いた。
　出入り口を見ると、３人組の男子生徒が何やら様子をうかがうように立っている。
　控えめな声で挨拶した男（仮に男子生徒Ａとする）は、祐介と同じぐらいの背丈で、ふわりとした感じのミディアムヘアがよく似合っており、清々しい顔立ちをしている。肩にはベースを担いでいる。
　男子生徒Ａの右隣には、推定身長１７０？ぐらいで、龍馬よりも少し長めのベリーショートヘアをダークブラウンに染めた男がギターを左手に持って立っている（仮に男子生徒Ｂとする）。男子生徒Ｂは、ただ何気なく部室の中をなめ回すように見ていた。
　男子生徒ＡとＢの後ろには、ロングヘアーに近い髪を真ん中で分けた、切れ長の目をした男が部室を覗き込むように立っている。背丈は１７５？あるかないかぐらいだろうか（仮に男子生徒Ｃとする）

。
桐田「おっ、来たな！　待ってたぞ！」
桐田が嬉しそうに立ち上がる。
桐田「遠慮しないで入りなよ！」
男子生徒Ａ「あ、じゃあ失礼します」
男子生徒Ａ・Ｂ・Ｃは遠慮がちに部室内へと入ってきた。
　龍馬たちは「この人たち誰？」というような目で３人をただ見ていた。しかし、３人の男子生徒も同じ気持ちで龍馬たちを見ていたのだった。
健「来たな、入部希望の新入生たちよ！」
男子生徒Ａ「はい。よろしくお願いします」
男子生徒Ａは軽く頭を下げた。
雁之助「おぉ、さわやかボーイの登場だ！　なぁナミー」
南「…うん」
南は静かに答えた。南と雁之助は初対面のようだ。
龍馬「あの、ケンさん、彼らは誰なんすか？」
健「お前らと同じ、入部希望の１年だよ」
龍馬「１年！　これはこれは初めまして」
龍馬は男子生徒たちに向かって軽く会釈をした。
男子生徒Ａ「あ、あぁ、どうも」
男子生徒たちも会釈を返す。
健「何あわててんだよ？　早く準備しろって」
健たちがクスクス笑う。
龍馬「は、はい（＾＾ゞ」
龍馬はまたあわててチューニングに入った。
桐田「今日みんなセッションしに来たんだろ？」
男子生徒Ａ「はい」
桐田「今あの１年が何か演奏してくれるんだって。悪いけど、セッションならその後でもいいかな？」
男子生徒Ａ「はい、いいですよ！」

健「いい返事だなぁ。ガンちゃんじゃないけど、まさにさわやかボーイだ」
男子生徒A「いやぁ、さわやかだなんて…」
少し照れる男子生徒A。
健「そういや、自己紹介まだだったな。オレは甲本健。ケンって呼んでくれ」
健に続き、南と雁之助も自己紹介をした。桐田だけは前日に自己紹介を済ませていたので、この場ではしなかった。
男子生徒A「あ、自分は難波隆太（なんばりゅうた）っていいます。1年2組です」
男子生徒B「同じく1年2組、横山恒一（よこやまこういち）です」
男子生徒C「畑野章（はたのあきら）です。オレも同じ2組っす」
健「ほぉ、じゃあみんな同じクラスなんだ」
難波「そうですね」
健「今準備してるあいつらもみんな同じクラスなんだよ。やっぱ同じクラスに音楽好きがいるとバンドなんか簡単に組めるんかなぁ」
難波「そうかもしれないっすね」
　それっきり、健は話すのをやめた。やめたというよりは、何かよさそうなアイディアが彼の中で浮かんだために自然と会話が途切れたという感じである。一方の難波は少し緊張気味だったので、そんな健の態度はまったく気にならなかった。
龍馬「ケンさーん！　セッティングできましたぁー！」
龍馬たちのセッティングが済んだようだ。
　健は待ってましたとばかりに椅子から立ち上がり、こう言った。
健「リョウ、プレイすんのちょっと待ってくれ。なぁ、難波くんたちもチューニングしてもらっていいかな？」
難波「え？　何でですか？」
健「オレ今いいこと思いついた！」
龍馬「何すか、いいことって？」
健「わりぃリョウ、オレ今日お前らとセッションの約束したけど予定を変更するわ」

龍馬「え？」
健「リョウたち3人と難波くんたち3人がプレイして、上手かったほうとオレがセッションするってことにしてくれない？」
祐介「ケ、ケンさん、それって…」
健「そう。今から1年同士で“タイマンバンド演奏対決”をやってもらうのさ！」
難波・恒一・畑野「えぇぇ！？」
龍馬・祐介・延彦「マ、マジすかぁ！？」
部室にいた1年生全員が目を丸くして健に視線を集中させている。
桐田「おぉ、そりゃおもしろそうだな」
恒一「…で、ジャッジは誰が？」
健「もちろん、ここにいるオレらがやる！」
延彦「…まいったな、こりゃ」
思わず延彦の顔にも苦笑いが浮かぶ。一気に緊張が高まった証拠だ。
龍馬「まぁ、いいじゃねーか。どうせステージ上じゃ大勢の人間に見られるんだ。ここでビビッてたらバンドマンは務まらねーぜ」
健「お、いいこと言うなぁ。その通りだぜ、リョウ」
祐介「でもさリョウ、お前何気に緊張してない？」
龍馬「う、うるせーな！　それはお前だって一緒だろ！」
龍馬は明らかに動揺の色を見せた。部室に笑いが起こる。
健「じゃリョウ、頼むわ」
龍馬「はい！」
　健の発案によって突然行われることになった、1年生同士による“タイマンバンド演奏対決”。この対決に勝利し、健とセッションできる権利を獲得するのは、果たして龍馬・祐介・延彦の3人か？
　それとも難波・恒一・畑野の3人か？

Track 2：Punk Rock High School？

健「いいかリョウ、ユースケ、ヤマさん、思い切りプレイするんだ！　手抜きしたら入部は認めねーからな！」
突如、突発的に「タイマンバンド演奏対決」が始まってしまった軽音楽部の部室。興味津々なのは健を初めとした3年生だけである。
龍馬「はい！　わかりました！」
緊張感を吹き飛ばすように、龍馬が大声で返事をする。この局面で手抜きなどできるはずがない。
健「よし、いい返事だ。難波くんたちもこの後やってもらうけど、ぜってー手抜きはするなよ。バンドマンである以上、ステージ上で出し惜しみはよろしくねーからな」
難波「はい」
　龍馬たちは向かい合い、演奏する曲目を相談する。
延彦「何をやる？」
龍馬「ＧＲＥＥＮ　ＤＡＹだな。ここは少しでもやり慣れた曲のほうがいいだろう」
祐介「そうだな」
健「リョウ！　準備はいいか！？」
龍馬「はい！　ＯＫです！」
健「よーし、思い切ってやってくれ！」
ニコリと笑うと、龍馬はギターに手をかけた。
　最初の曲は、前日に充代と愛子にも披露した「Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｔｏ　Ｐａｒａｄｉｓｅ」だ。

　その頃、その充代と愛子は地学の補習に出ていた。
　参加者は彼女たちを含めて１０人ほど。みんな「早く帰りたい」というような顔をしている。
充代（早く終わらないかなぁ……）

愛子（部室に行きたい……）
２人とも考えていることは同じだった。
実はこの日、地学の小テストが実施された。彼女たちは成績が悪く、地学の教師が設定した合格点にあと一歩及ばなかったのだ。補習への参加は仕方のないことだった。
しかし、補習とはいっても、実際は追試と変わらない。教師が小テストに出題される内容をダイジェストで説明し、最後の１５分で再び小テストを行うといった流れになっている。おそらく、所要時間は説明の部分と小テストの部分を合わせておよそ３０分程度だろう。通常の授業に比べれば短い。だが今の充代と愛子には、その程度の時間さえうっとうしく感じられた。よほど龍馬たちと健のセッションを観てみたいのだろう。もっとも、当然ながら彼女たちはその予定が突然「タイマンバンド演奏対決」に変更されているなんて知らないのだが。
地学教師の説明は進む。
同時に充代と愛子の落ち着きが失われていく。
地学教師「おーい、黒谷、岡部、お前ら何をそんなにそわそわしてるんだぁ？　トイレでも行きたいのか？」
見るからに落ち着きがなくなっていたのだろう、不審に思った地学教師が注意する。
愛子「あ、いや……」
充代「な、何でもないです……」
地学教師「…そうか。ちゃんと話聞いてないとまた追試だぞ」
充代と愛子は恥ずかしそうに「すいません」と、小声で言うと、軽く頭を下げた。
それから約５分後、教師の説明が終わる。
地学教師「じゃあ、これから追試を始めるぞ。制限時間は今日の授業と同じ１５分。ただし、今回はテスト終了５分前までに回答し終えた者に限り退室してよろしい！」
その言葉に反応し、反射的に充代と愛子は同時に視線を地学教師に

集中させた。
愛子「ホ、ホントですか？」
この時の愛子はわりと迫力があったという。
地学教師「あ、あぁ、ホントだ。でも、答案を提出する前に見直しだけは忘れるなよ」
愛子「はい！　ありがとうございます！」
地学教師「アホゥ！　礼なら無事にテストを終えてから言え！」
教室中に笑いが起こる。愛子も自分がやや興奮気味だったことに気づき、その顔を一瞬で真っ赤に染めた。
充代「バ、バカね！　気持ちがフライングしすぎよぉ！」
隣にいる充代も恥ずかしそうだ。
愛子「ご、ごめん……」
それっきり愛子は黙りこくってしまった。
しかし、テストが始まってからの、充代と愛子の集中力は凄まじかった。
なんと、2人ともたったの5分半で全問解き終えてしまったのだ。
これには地学教師も驚いてしまった。
地学教師「お、お前ら、まさかカンニングしてないだろうな……？」
充代「してませんよぉ～！　実力です、ジ・ツ・リョ・ク！」
愛子「それじゃ、お先に失礼しまーす！」
充代と愛子は、疾風（はやて）の如く教室を飛び出していった。
後に彼女たちは語る。
「あれは、人生で最大級の集中力を発揮できた日だった」と――。

最初の曲である「Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｔｏ　Ｐａｒａｄｉｓｅ」をプレイし終えた龍馬たち。
龍馬「ふぅぅーっ……」
龍馬が大きく息を吐いた。前日とは違った緊張感があるのだろう。
憧れだった健たちの目の前なのだから、無理もない。
健は、「うん、うん」と、何か手応えを感じているかのような表

情で小さく何度か頷く。
祐介（リョウのヤツ……気分がのってきやがったな）
何度か小刻みに頷いている龍馬を見た祐介もまた、小さな笑みを浮かべていた。
龍馬たちの演奏を初めて聴く桐田たちは、顔だけで「ほぉ～」と言っている。
桐田「うーん、もうちょっとやってもらってもいい？　あと、もう何曲か」
1曲だけでは判断しかねるのだろう。桐田がリクエストをする。
龍馬「はい、いいっすよ！」
龍馬も快くそれに応じる。少し緊張が解けたか。
龍馬「さーて、次どうしようか？」
祐介「次もＧＲＥＥＮ　ＤＡＹからやるか」
延彦「そうだな。昨日2曲目に何やったっけ？」
祐介「確か……“Ｎｉｃｅ　Ｇｕｙｓ　Ｆｉｎｉｓｈ　Ｌａｓｔ”じゃなかった？」
龍馬「じゃあそれやろうよ。つーか昨日と順番一緒でよくね？」
祐介「いいよ。いちいち順番考え直すのも時間の無駄だしな」
延彦「よし。じゃあいくぞ」
2曲目「Ｎｉｃｅ　Ｇｕｙｓ　Ｆｉｎｉｓｈ　Ｌａｓｔ」がスタート。
雁之助が足でリズムをとり始めた。健も首を上下に動かしながら楽しそうな顔をしている。
途中、龍馬が歌詞を忘れた。しかし、口でごにょごにょと適当に歌ったのが逆に周囲の笑いを誘った。横でベースを弾いている祐介でさえ笑ってしまっている。
2曲目を終えた龍馬たち。
祐介も延彦も、パンクした自転車のチューブから漏れた空気のように勢いよく吹き出した。
祐介「おっ、お前、何だよさっきの！　適当にごにょごにょと歌い

やがって！」
龍馬「ごめん！　歌詞忘れちゃったんだよ」
延彦「てかリョウ、あれ何て言ってたんだ？」
龍馬「“エロイムエッサイム　エロイムエッサイム”…って」
祐介「“悪魔くん”かよ！」
再び笑いが起こる。
健「はっはっはっ！　何でそこで“悪魔くん”なんだよ！」
健たちも腹を抱えて笑っている。

　ちょうどそこへ、補習を終えた充代と愛子がやって来た。
充代「あれ？　もう始まっちゃってんの？」
健「おう、おせーぞお前ら」
充代「しょうがないじゃん、補習だったんだから」
愛子「あれ？　でも今日はケンとリョウくんたちのセッションじゃなかった？」
健「いや、そのつもりだったんだけどよ、熱烈に入部を希望する新入生がこんだけ来たもんだからさ、ちょっくら“タイマンバンド演奏対決”でもやろうかなーって思って」
愛子「タイマン……？」
愛子は部室の隅っこで楽器をいじっている難波たちに目を留めた。
愛子「あ、もしかしてキミらも入部希望の1年生なの？」
難波「はい、そうです」
充代「確かHi－STANDARDやってたっていう……」
難波「あ、はい」
充代「おぉ、じゃあこの後キミらの演奏も聴けるのかな？」
難波「はい、そうみたいです」
健「おいおい、他人事みたいに言うな（笑）　この次出番なんだからちゃんと準備しとけよ」
難波「あ、はい。すいません」
難波は恥ずかしそうに笑った。それを見て、充代もクスッと笑う。

龍馬「あのぉ～……」
健「何だ？」
龍馬「次の曲、やっていいっすか？」
健「ん？　あ、ああ、いいよいいよ！　どんどんやってくれ！」
　それから龍馬たちは４曲ほど演奏した。
龍馬「この辺で今日はやめときます。ありがとうございました！」
健たちに頭を下げ、龍馬たちは自らの出番を終えた。
健「総評は後でまとめてやる。難波くんたち、準備はいいか？」
　次は難波たちの出番である。
　龍馬たちの演奏中にチューニングを済ませておいたため、セッティングはごく短時間で済んだ。難波が頭の上で丸印を作る。
健「よし、じゃあいってみよう！」
　数秒の静寂が流れると、畑野のフィル・インが押し寄せてきた。Ｈｉ－ＳＴＡＮＤＡＲＤの「Ｔｕｒｎｉｎｇ　Ｂａｃｋ」だ。
　その後、間髪入れずに「Ｓｔａｎｄｉｎｇ　Ｓｔｉｌｌ」をプレイ。どうやら、Ｈｉ－ＳＴＡＮＤＡＲＤのアルバム「Ｍａｋｉｎｇ　Ｔｈｅ　Ｒｏａｄ」を１曲目から順番に演奏するつもりなのだろう。彼らのファンなら、それだけでもテンションが上がるものだ。
　メインヴォーカルは、ベースの難波が受け持つ。本人たちと同じスタイルだ（何の偶然か、苗字まで同じである）。
祐介（な…何だこいつら……同じ高校生か？）
延彦（ドラムが、パワーだけじゃなくて細かいフィルまでしっかりできてる。リズムのズレもほとんどない…。いったい誰に習ったんだ？）
龍馬（クソッタレめ……なんだか自分がアホらしくなってきたぜ）
龍馬たちは、度肝を抜かれていた。同学年とは思えないほどの演奏レベルを誇るのだから、無理もない。充代や愛子もこれには驚いていた。
充代「な…なんて子たちなの……。とても高校生とは思えないんだけど」

愛子「……すごい……」
　健は、ニヤニヤと嬉しそうに笑いながら難波たちの演奏を観ている。この対決の勝者を、既に決めているのだろうか。しかし、この場は負けても仕方がないことを龍馬たちは悟っていた。今の状態では、どう逆立ちしても難波たちには勝てない――。
桐田「さすがだな。無茶ぶりなのにもかかわらず、堂々としてるぜ」
健「無茶ぶりって言うな」
雁之助「でも、すげーよ。ある意味ライブより緊張する場面でも淡々とこなしてるもんな」
健「…そうだな、“淡々と”こなしてるな」
　一瞬にして部室にいたほとんどの人間を驚かせた難波、恒一、畑野の3人。淡々とした表情とは対照的に、高校生離れしたテクニックを見せつける。
　ベースプレイだけでなく、歌唱力でも魅せる難波。当然の如く自在に4本の指をフレット上で遊ばせる恒一。力強さと安定感のあるテクニックでしっかりと土台を支える畑野。
　プレイで勝てないのなら、せめて技術だけでも盗もうと難波たちを観察する龍馬、祐介、延彦の3人。
龍馬（あの難波ってヤツ、見た目もさわやかだけど声もいいモン持ってやがるな……。中学の時は女にモテてたんだろうなぁ……）
龍馬は、難波が少しうらやましくなった。「自分もさわやかな顔立ちだったら……」と、わずか一瞬だが妙な妄想にふけってしまっていた。
龍馬（あの横山ってのも、どうやったらあんなに指が動くんだ？どんな練習してんだよ）
延彦（あのドラムは、オレよりも手首が柔らかい。だから細かいフィルもできるんか）
祐介（無駄のないベースだな。ドラムと同じぐらい安定している）
気づけば龍馬たちは難波たちを凝視していた。その目はかなり真剣だ。

美穂「ね、ねぇリョウちゃん」
美穂が小声で龍馬に話しかける。
美穂「あの人たちもウチらとタメなんだよね？」
龍馬「そうみたいだね。だけど、とてもタメとは思えないよ」
美穂「うん…。リョウちゃんたちも上手かったけど、あの人たちもすごいよ」
龍馬「ああ……」
龍馬は、再び観察に戻る。
　難波たちは６曲目に差し掛かっていた。６曲目はＨｉ－ＳＴＡＮＤＡＲＤの名曲「Ｓｔａｙ Ｇｏｌｄ」だ。イントロとラストのサビ前のフレーズがかなりカッコいい。ほとんどつかえることなくイントロのフレーズを弾きこなす恒一。
龍馬（こ、こいつ、「Ｓｔａｙ Ｇｏｌｄ」のイントロを軽々と弾きやがった！　オレはまだ練習中だってのに…！）
悔しそうに苦笑いする龍馬。やはり、ここは負けを認めるしかなさそうだ。

　それから難波たちは、更に１曲演奏して出番を終えた。健たち３年生は彼らに拍手を送る。
健「おし、みんなお疲れ！」
龍馬「ケンさん、オレら勝ち目ないっすよ。うますぎじゃないっすか……」
健「待てよリョウ、ジャッジをするのはオレだ」
「そうだった」というような顔をして、龍馬は黙りこくる。
健「よーし、じゃあ判定の結果を言うぞ」
部室にいた全員が健に視線を集める。
健「判定は……引き分けだ」

Track 2：Punk Rock High School？

意外な結果だった。
突如、甲本健の発案で行われた「タイマンバンド演奏対決」は、両バンド引き分けという形で決着をみたのだ。

龍馬「ケンさん、引き分けっすか？　明らかに彼ら（＝難波たち）の方がうまかったですけど……」
理由がわからず、目を丸くしている龍馬たち。
　健はニコリと笑みを浮かべ、龍馬たちの方へと歩み寄る。
健「……リョウ、よく“音楽はハートだ”っていうだろ？　あれってどういうことだと思う？」
龍馬「さぁ……よくわかりません」
健「そうか。じゃあさ、“カッコいいバンド”って、どんなバンドだと思う？」
龍馬「うーん……演奏が上手なバンドとか…ですか？」
健「演奏が上手……まぁ、確かにそうだな。演奏が上手だってこともカッコいい要素の一つだ。だけど、オレはそれだけじゃ人の心を動かすのはなかなか難しいと思うんだ」
祐介「他に何かが必要だってことですか？」
健「そうだ。その“何か”が、実はハートなんだ」
龍馬たちは黙ってそれを聞いている。健は更に続ける。
健「“今ステージでプレイしててすげー楽しい！”って気持ちやその他の感情のような、目には見えないモノを音に乗っけて、観てる側の人間に伝えるんだよ」
龍馬「伝える……？」
健「おう。うまいバンドなんか観てるとわかるだろ？　アクションとか表情とかさ」
龍馬「あぁ…なるほど」

健「リョウ、お前はさっき“勝ち目がない”って言ってたな。確かに今の演奏レベルだけだと難波くんたちの方が上だ。でもな、ハートの部分じゃお前らのほうが上だ」
龍馬「え？」
健「その場を楽しんでたのがよくわかった。ライブ経験がないのにたいしたもんだ。普通は演奏するだけでいっぱいいっぱいになるぜ、初めのうちはな」
龍馬「へぇ…そういうモンなんすか」
健「そうだよ。難波くんたちだって、今日初めて人前で演奏しただろ？」
難波「はい。ちょっと緊張しました」
龍馬「えっ？　じゃ、じゃあ、演奏するだけでいっぱいいっぱいだったんか？」
難波「うん。あんまり周りを気にしてる余裕はなかったかもね」
恒一「確かに、見えてなかったっちゃあ見えてなかった」
畑野「…オレはよくわからん」
龍馬「へぇ～……そんな風には見えなかったけどな」
健「――まぁ、そういうわけで引き分けだ。技術も気持ちの伝え方も、ちゃんとバンドやってりゃそのうち身につくさ。技術と気持ちの両方が身についた時、お前らは最強のバンドになるだろうぜ」
そう言う健の目は輝いている。きっと、龍馬や難波たちの成長が心の底から楽しみなのだろう。
龍馬「マジすか？」
健「ああ、マジだ。だからしっかり練習しろよ！」
龍馬「わかりました！　精神と時の部屋に入ってでもガッツリ練習します！」
祐介「は？　何だそりゃ？」
健「はっはっはっ！　何で精神と時の部屋が出てくるんだよ！」
祐介「まったく、調子にのって意味不明なこと口走ってんじゃねーよ」

桐田「ケン、ひとつ聞いていいか？」
健「何だ？」
桐田「お前さ、ホントは1年の演奏を純粋に見たかっただけじゃねぇ？」
健「あ、わかった？」
延彦「えっ？　そうだったんすか？」
恒一「じゃあ、もともと勝敗をつける気もなかったとか？」
龍馬「それだったら、初めからセッション大会みたいにすればよかったんじゃ……」
健「いやいや、対決の方が盛り上がるだろ？　やる方の本気度も違ってくるだろうし」
慌てて弁解する健。若干納得がいかない様子の龍馬たち。
健「まぁ、引き分けだったからよかったじゃねーか！　これからみんなでセッションして遊ぼうぜ！　な？」
龍馬「……まぁ、いいか！　やりましょうケンさん！」
実際、龍馬は気にしていなかったようである。
健「おお！　わかるなリョウ！　早速やるか！」

龍馬が再度ギターをセッティングしようとした時である。
部室の扉が開く。ものすごい勢いで開いたので、部室にいた全員が入口の方を見た。
扉の向こうに立っていたのは、地学教師だった。先程まで充代と愛子の補習を担当していた、あの教師だ。
地学教師「……やっぱりここだったか」
肩で息をしながら、地学教師は険しい表情で充代と愛子の顔を順々に睨んだ。そのただならぬ雰囲気を察した充代が、地学教師に尋ねる。
充代「あ、あの、どうしたんですか？」
地学教師「“どうしたんですか？”じゃない！　黒谷！　岡部！　今すぐ地学室に来い！」

愛子「え？　どうしてですか？」
地学教師「バカモン！　さっきの再テスト、お前ら二人揃って解答欄が一つずれてたぞ！　これから再々テストだ！」
充代＆愛子「えぇー！？」
地学教師「とにかく、いますぐ地学室まで来るんだ！　テストを受けないと成績がつけられんぞ！」
そう言い残して、地学教室は踵を返して地学室へ戻って行った。
健「ぶわっはっはっはっはっ！　お前らアホだなぁ！　もうちょっと落ち着いてやれよ！」
桐田「しかも二人揃ってるし！　なかなかないぜ、こんな珍事は！」
健たち3年生は爆笑している。
充代「う、うるさいなぁ！　誰にだってミスはあるでしょ！」
顔を真っ赤にしながら、必死に反論する充代。
南「あのさ、早く行った方がいいんじゃない？　成績つかなかったら大変だよ」
ボソッとささやくように南が充代と愛子を促す。
充代「わっ、わかってるわよ！　アイコ、行こう！」
愛子「う、うん！」
充代と愛子は急いで部室を飛び出して行った。

　こうして、龍馬たちは軽音楽部への入部を認められた。そして、憧れだった甲本健との再会や共に軽音楽部を盛り上げていくことになる仲間の難波隆太や横山恒一、畑野章との出会いを果たした。この時より、彼らのロックでパンクな高校生活が本格的に始まる。

Ｔｒａｃｋ　３：南陽ルーキー争奪戦？（前書き）

朝イチから龍馬たちの前に現れた男とは…？

Ｔｒａｃｋ　３：南陽ルーキー争奪戦？

軽音楽部への入部を認められた龍馬たち。既に入部届も提出済みだ（タイマンバンド演奏対決の直後に提出したらしい）。前話では書かなかったが、対決に参加しなかった美穂と明子も龍馬たちと共に軽音楽部へ入っていた。

それから2日後の朝。
1年4組の教室に、楽器を抱えた龍馬と祐介が登校してきた。
美穂「あ、おはよー」
先に登校していた美穂と明子が話しかけてきた。
龍馬「おっす」
祐介「おはよう」
明子「あれ、二人とも楽器持って来てるけど、今日部室使えたっけ？」
美穂「そうだよ。今日は上級生との初顔合わせがあるじゃん」
美穂の言うとおり、この日は上級生と新入部員の初顔合わせが部室で行われることになっているのだ。それなのにもかかわらず、龍馬と祐介が楽器を持って来ていることに美穂と明子はちょっとした疑問を感じていた。
龍馬「いや、昨日ケンさんが“顔合わせの後は誰も使わないから使っていい”って言ってたから、ちょっとやっていこうと思って」
美穂「へぇ～、やる気だね！」
龍馬「まぁね」
そう言って、龍馬は照れ笑いをした。
祐介「あんまりおだてないほうがいいぞ。こいつ、すぐ調子にのるから」
龍馬「黙れユースケ！」
美穂「あはははは。リョウちゃんってそういうタイプなのね」

そうやって楽しく談笑しているところへ、延彦がやって来た。
祐介「おう、ヤマさん。スティックは持って来たか？」
延彦「おぉ、持って来たぞ。顔合わせの後で部室を使わせてくれるんだろ？」
龍馬「そうだ。これで練習できるな！　あー楽しみだ」
そう言いながら、龍馬は教室の奥へ自分のエレキギターを置きに行った。祐介もそれに続く。
教室の奥、いちばん窓際の角には掃除用具を収納するロッカーがある。そのロッカーと壁の間に、ちょうどよい隙間がある。自席の側に置けば何かと不都合が生じるので、教室奥の、人目につきにくいロッカーと壁の間に楽器を置いておくのだ。

龍馬と祐介が楽器をその隙間に押し込んだ時、教室の入口からドタドタと荒々しい足音が聞こえてきた。龍馬と祐介がその方向へ振り返ると、何人かの生徒が入口の方に注目している。美穂と明子、そして延彦もそちらを見ていた。
入口には、男子生徒が立っていた。体格は龍馬とほぼ同じか、少し龍馬より大きいぐらい。さっぱりと刈り上げられた黒い頭髪と彫(ほ)りは深いが精悍な顔つきは、いかにもスポーツマンといった風貌だった。
龍馬「あ……」
祐介「あいつは……」
龍馬と祐介はその男子生徒に見覚えがあるようだ。
明子「ねぇ美穂、あの人確か……」
美穂と明子にも見覚えがあるようだ。
延彦「知ってるのか？」
美穂「うん。あの人は確か大和田中バスケ部出身の外山くん。去年の夏の大会でリョウちゃんやユースケくんと戦った相手よ」
延彦「何だって？」
男子生徒の名は外山勇一郎(とやまゆういちろう)。大和田中バスケットボール部の出身

で、かつて龍馬と祐介がいた上加中学校バスケットボール部を試合で打ち破ったことがある。ポジションはパワーフォワード。フィジカルが強く、攻守共に優れた選手であった。
　外山は黙って教室の中を見回していた。やがて奥にいた龍馬と祐介を見つけると、一直線に二人を目がけて両足を踏み鳴らしながら突き進んで行った。
　龍馬と祐介の目の前で、外山は足を止めた。何も言わずに二人を睨みつける外山。
龍馬「……よ…よう、久し振りだな」
祐介「ま、まさか同じ高校になるとはなぁ。奇遇だな」
何ともいえぬ雰囲気に負け、とりあえず当たり障りのない挨拶で会話の糸口をつかもうとする龍馬と祐介。
外山「……どういうことだ」
龍馬「…え？」
外山「沢村、佐山…お前ら……お前ら……軽音楽部に入ったってどういうことだ！」
祐介「なっ、何だよ急に！」
外山「どうしてバスケ部じゃないんだ！」
龍馬「おっ、お前、わざわざそんなこと言いに来たのかよ！？　何部に入ろうとオレらの勝手だろ！」
外山「もったいないぞ！　何でバスケを選ばなかった！」
祐介「いや、だから……」
外山「考え直せ！　今からでも遅くはねぇ！」
激しく龍馬と祐介に詰め寄る外山。
外山「なぁ、一緒にバスケやろうぜ！　オレ、お前らが南陽入ったって聞いて嬉しかったんだよ。お前ら二人の腕があればもっと強くなる。インターハイも夢じゃない。だからよぉ、バンドじゃなくてバスケやろうよ！」
龍馬「外山、わりーけどそれはできねぇ」
外山「何で？　バスケが嫌いになったのか？」

龍馬「そうじゃねぇ。オレらは中学の時から南陽の軽音楽部でバンドをやるって決めてたんだ。バスケは嫌いじゃねーけど、今はそれ以上にバンドがやりてぇ」
外山「おいおい、それじゃ体がなまっちまうぜ？　せっかく高い身体能力を持ってるんだから、使わなきゃ損だぞ？」
祐介「そういう問題じゃなくてな、オレらはバンドがやりてーんだよ。この意味がわかるか？」
外山「ぐ……」
外山の顔が引きつり始めた。
外山「お前らぁ！　バスケへの情熱はどうしたぁ！　あの勝負は何だったんだ！」
再び激しく龍馬と祐介に詰め寄る外山。それを必死に引き離そうとする龍馬と祐介。
祐介「やっ、やめろ！　ちょっと離れろ！」
龍馬「あのな、もう決めたんだよオレらは！　いい加減理解しろ！」
外山「バスケ部に入れぇー！」
外山の興奮は収まらない。
――と、そこへ事態を見かねた延彦が割って入る。
延彦「おっと、そこまでにしな」
龍馬「ヤマさん！」
外山「何だ！　止めるな！　オレはこの二人を説得に来たんだ！」
延彦「えっと……外山くん…だったっけ？　みんな見てるよ。もうこの辺にするんだ。それに、リョウとユースケの意思は固まってる」
外山「しかし――」
続きを言いかけて、外山は教室全体を見回してみた。
　確かに、延彦の言うとおり1年4組の生徒全員がこちらを見ている。外山は、一瞬にして気まずい思いに駆られてしまった。
外山「……ちっ」
外山は、そうやって舌打ちするのが精一杯だった。左足を軸にして素早く体を後方へ反転させると、彼は誰とも目を合わすことなくそ

そくさと教室を出て行ってしまった。
龍馬「――ふう、やれやれだ」
祐介「まったくだ。朝からとんだ目に遭ったぜ」
美穂「リョウちゃん、ユースケくん、大丈夫？」
美穂と明子も心配して駆け寄って来た。
龍馬「おう。大丈夫だよ」
延彦「それにしても、何なんだあいつは？　中学時代にバスケの試合でお前らと戦った相手らしいけど……」
祐介「あぁ。あいつは大和田中の外山だ」
明子「だけど、急に押しかけて来るからビックリしちゃったよ。外山くんってあんな人だったの？」
龍馬「いや、オレも驚いたよ。中学の時はもっと爽やかな感じのキャラクターだったと思ったけど」
祐介「まぁ、こうなることはある程度想定してたけど、まさか教室にまで押しかけて来るとはな。リョウ、当分は気をつけた方がいいな。あの感じだと、これで外山がおとなしく引き下がるとは思えねぇ」
龍馬「ああ、そうだな。なんだかめんどくせーけど」

昼休み。
龍馬と祐介、そして延彦の3人は学生食堂へ来ていた。
祐介と延彦は既に食券を購入し、カウンターに並んでいる。
龍馬が券売機に５００円硬貨を投入しようとした時、何者かが後ろから龍馬の肩をポンポンと叩いた。いったい誰だろうと、背後を振り返る龍馬。
龍馬の後ろには、中年男性が並んでいた。体格は龍馬よりやや小さめだが、髪型がオールバックなうえに、半ば伸び晒したようなヒゲをたくわえており、わりといかつい風貌である。しかし、どう考えてもこの学校の教師であることは間違いない。
龍馬「あの……何ですか？」

教師「あのさぁ、悪いんだけど、２０円貸してくんないかな？」
龍馬「２０円？」
教師「ああ。あと２０円あれば、小銭でＡランチが食えるんだ」
龍馬「はぁ……」
　この時龍馬は、「この男は何を言い出すのだろう」と思った。生徒とはいえ、普通は初めて見た人間に対して小銭を貸してくれと頼むだろうか。金額の問題ではない。だが、この教師が小銭入れを見てしかめっ面をしている様子を見ると、２０円ぐらい貸してもよいだろうと思ってしまう龍馬であった。
龍馬「…いいですよ。２０円ですよね」
教師「おっ、いいの？」
龍馬「はい。どうぞ」
１０円玉を2枚、教師の掌に置く龍馬。
教師「すまん、悪いな。後でいいことあるぜ！　はっはっはっ！」
教師はそう言って龍馬の肩を強めにバシッと叩いた。ちょっと痛い。
龍馬（……何なんだ、この人は）

　そして、それぞれがカウンターで注文した品物を受け取り、空席を探していると、偶然にも先に食堂へ来ていた難波や恒一、そして畑野の3人に出くわした。しかも彼らの隣に3人分の空席があったので、龍馬たちはそこで食べることにした。
　食べ始めると同時に、龍馬が外山と朝一番にもめた話をした。
難波「へぇ～、そりゃ大変だったねぇ」
龍馬「ああ、朝から疲れちまったぜ」
祐介「しかも、オレらが絶対バスケ部へ入るって思い込んでるところがある意味すげぇ」
延彦「まぁ、そうだな。いきなりあんな言い方されりゃあ対応に困るよ」
恒一「そういやハッチ、お前昨日の放課後、体操部の人に声かけられてなかったか？」

「ハッチ」とは、畑野のあだ名である。
龍馬「体操部？」
畑野「うん。中学時代は体操部だったんだ。そんでさ、オレもリョウたちみたいに“体操部に入らないか？”って言われた」
難波「オレも水泳部からスカウトされたよ。中学の時水泳部にいたからさ」
恒一「オレは剣道部から声かけられたよ。どこからオレが経験者だって情報が漏れたんだろうな」
祐介「なんだよ、どこもかしこもスカウトだらけだな」
難波「まぁ、まだ新年度が始まったばかりだからしょうがないよ」
祐介「…それもそうだけど、オレらはもう軽音楽に決めてんだぜ？　そこんとこ理解してくれないと困る」
龍馬「確かに」

その時、龍馬は背後に人の気配を感じた。
カレーライスを口に含んだまま、後ろを振り返る。
外山だ。外山が腕組みをして龍馬と祐介を見下ろしている。
延彦「また出たか」
外山「見つけたぞ～……こんな所でメシ食ってやがったか」
龍馬「どこでメシ食おうと人の勝手だろうが」
祐介「あのな、どんなに説得してもバスケ部には入らねーぞ！」
外山「どうしてもか？」
龍馬「どうしてもだ！」
外山「そうか……」
外山は、一度天井を見上げた。
そして、今度は何か意を決したような目つきで龍馬と祐介を見下ろした。
外山「そんなにバンドがやりたけりゃ、オレと勝負しろ！」
龍馬「は！？　勝負だと！？　タイマンでも張ろうってのか？」
外山「ケンカじゃねぇ！　１ｏｎ１で勝負するんだよ！　勝てばも

うバスケ部へは勧誘しない」
祐介「あ？　お前何言ってんだ？　そんな勝負のるわけねーだろ！」
外山「のれよ！　のらないと、お前らの秘密をばらすぞ！」
龍馬「秘密だぁ？　んなモンねーよ！」
外山「ふっふっふっ……オレは知ってるんだぞ。ばらされてもいいのか？」
祐介「残念だが、オレにもばらされて困る秘密はないぞ」
外山「まぁいい。とにかくお前らはこの勝負にのらざるを得ないってことだけは覚えとけよ」
それだけ言うと、外山は食堂の外へ出て行ってしまった。
畑野「……何だあいつ」
龍馬「さっき話したろ？　今朝ウチの教室に乗り込んで来たバスケ部の外山ってヤツだよ」
難波「秘密って？」
龍馬「秘密なんてあるわけねーだろ。あいつ、ああやって脅せばオレらが動揺するとでも思ってんだよ」
恒一「とりあえず執念だけは伝わってきたな」
祐介「ああ。執念だけはな」

しかしその日の放課後、事件は起きた。
軽音楽部の初顔合わせに出席するため、部室へ向かおうとしていた龍馬たちの前に、４人組の男子生徒が立ちはだかる。
「ドラえもん」のスネ夫に似た男、「キテレツ大百科」のトンガリに似た男、「北斗の拳」によく登場するようなモヒカン刈りの男、そして「ちびまる子ちゃん」の丸尾末男に似た男が睨みをきかせながら龍馬たちを取り囲んでいる。恐怖を感じた美穂と明子は龍馬たちの後ろに隠れている。
龍馬「……何か用か？」
丸尾男が、「本物」を思わせるメガネの位置を直しながら、不気味な笑みを浮かべる。

丸尾男「キミたち、沢村くんと佐山くんだね？」
なんだか口調まで「本物」そっくりだ。
祐介「そうだけど？」
龍馬「おたくらは？」
スネ夫男「空手部の者だ」
龍馬「空手部？」
スネ夫男「そうだ。お前たちをスカウトしに来た。空手部に入れ」
祐介「あのよぉ、いきなりやって来て“空手部に入れ”だなんて、ぶしつけにもほどがあるぜ」
龍馬「それに、初対面の人間に対してお前呼ばわりとは、礼儀がなってねーなぁ。武道を嗜む者は礼儀を重んずるべきだぜ」
モヒカン男「いいから一度来てみろよ」
龍馬「断る。オレらはもう軽音楽部に入るって決めたんでね」
トンガリ男「キミたちに“断る”って選択肢はないよぉ～」
まるで「本物」さながらの口調で話すトンガリ男。
龍馬「あ？」
トンガリ男「秘密、ばらされたくないでしょ？」
祐介「何言ってんだ。オレらに秘密なんてありゃしねーよ。まるで外山みてーなこと言うな」
トンガリ男「あぁ……その外山くんも同じようなこと言ってたねぇ。オレらも彼にその秘密を聞き出そうとしたんだけどね、“知らない”の一点張りで何も答えないから、軽くおしおきしちゃった♪」
スネ夫男「だから、直接本人から聞き出そうと思ってな」
龍馬「何だと？　お前ら、外山に何をした？」
丸尾男「我々についてくるというのなら教えてあげるよ」
延彦「おい、さっきから聞いてりゃやり方がメチャクチャだぞ。外山とこいつらが空手部に入る話は別問題だろう！」
スネ夫男「部外者に用はねぇ。引っこんでな」
モヒカン男「おい、こいつ確か東遊馬中の山崎だぜ。ついでだからこいつも連れていかねぇ？」

モヒカン男がスネ夫男に提案する。
スネ夫男「そうだな。そこそこ使えるかもしれねーしな」
龍馬「“ついで”だとよ。どうするヤマさん？」
延彦「ちょっとだけならつきあってやるよ。お前らだってそのつもりなんだろ？」
祐介「まぁな。外山を助ける義理もないんだけど」
龍馬「――でも、なんかこいつらはイラッとくるんだよな」
美穂「リョウちゃん……」
龍馬「美穂ちゃん、悪いんだけどケンさんたちに“少し遅れるかもしれない”って伝えといてもらえないかな？」
美穂「大丈夫なの…？」
心配そうな目をする美穂。
龍馬「心配ない。すぐに終わる」
龍馬は、そう言ってはにかんで見せた。
トンガリ男「うふふ、大した自信だねぇ」
龍馬「おい、こっちは忙しいんだ。早く外山の所へ連れてけよ」
スネ夫「……いいだろう。ついて来い」

Track　3：南陽ルーキー争奪戦？

龍馬、祐介、そして延彦の3人は、空手部員を名乗る男子生徒4人に連れられ屋上へ続く階段を上っていた。
祐介「…おい、空手部はこんな辺鄙（へんぴ）な場所で稽古してんのか？」
スネ夫男「黙って歩け」
祐介「…へいへい」

やがて、屋上への入口が見えてきた。このドアを開ければ屋上に出る。
モヒカン男が鉄製のドアを開ける。何もない、コンクリートと鉄柵だけの景色が広がる。
外山は、入口から見ていちばん奥にある貯水タンクの下辺りにうずくまっていた。どうやら気絶しているようである。そして、外山の横には、茶色の髪を肩まで伸ばした男が貯水タンクの柱に寄りかかり、だらしなく座り込んでいた。
スネ夫男「連れて来ましたよ、網場さん」
網場と呼ばれたその男子生徒は、ゆっくりと立ち上がった。体格は龍馬より少し小さいぐらいか。
龍馬たちはスネ夫男たちによって屋上の真ん中辺りまで押し込まれた。
網場「おう、ご苦労」
龍馬「なんだなんだ、オレらをこんな所まで連れて来やがって。お前らホントに空手部なのか？」
網場「ああ、そうだよ。オレは空手部の2年、網場ってモンだ」
龍馬「アミバ？　ひょっとして南斗聖拳の使い手だったりするんか？」
網場「フン、よく言われたよ」
龍馬「だろうな。外見もそれとなく似てるぜ」

祐介「網場さんよぉ、オレらをここへ連れてきた目的は何だ？」
網場「あいつらが言わなかったか？　スカウトだよ」
祐介「これがスカウトか？　とても健全なスカウトとはいえねーな。外山までこんなにしやがって」
延彦「ああ。空手をやるなんてデタラメだろう？」
龍馬「ホントの目的を言えよ」
網場「…いやぁ、スカウトってのはホントだよ。オレらの仲間になんねーかと思ってさ」
龍馬「イヤだ。断る」
網場「おいおい、ストレートに言うなよ。仲間になって損はねーぜ？」
祐介「オレらにはメリットが見当たらん」
網場「金谷たちも許してくれるってさ」
龍馬「カナヤ？　誰だっけ？」
誰のことかわからず、祐介と延彦に助けを求める龍馬。
延彦「…あ、もしかしたら入学早々オレらがぶっ飛ばしたヤツらじゃねぇ？」
網場「そうだ。よく覚えてたな」
龍馬「あんた、あいつの仲間か？　いったい何者なんだ？」
延彦「自分を倒した人間と仲間になろうと考えるなんて、どういうことだよ？」
網場「…まぁ、早い話がこの学校をシメちまおうってことだよ。金谷たちはお前らの強さを肌で感じた。シメるためにお前らの力を借りてーんだ。だからこうやってお迎えにあがったってわけだ」
龍馬「…なんだ、そんなことか。くだらねぇ。そんなことなら、外山を連れて帰らせてもらうぜ」
網場「断るのか。それがどういうことかわかってんだろうな」
龍馬「……いや、わからん」
祐介「！」
いつの間にか、龍馬たちの周りをスネ夫男たちが取り囲んでいた。

トンガリ男「言わなかったっけ？　キミらに“断る”って選択肢はないんだよ？」
網場「どうしても断るつもりなら、組手につきあってもらうぜ」
龍馬「組手だって？　どっちのルールでやるんだ？　伝統派か？　フルコンタクトか？」
網場「フルコンタクトだ」
龍馬「フルコンか…」
モヒカン男「そういうことだ。覚悟しな！」
　言うが早いか、モヒカン男は龍馬の顔面を目がけてパンチを放った！
　しかし、それをガッチリと受け止める龍馬。
モヒカン男「なっ！」
龍馬「……おい、空手の試合じゃ顔面へのパンチは反則のはずだろ？」
網場「あ？　オレらの知ったこっちゃねーよ」
龍馬「そうかよ…！」
　龍馬が、モヒカン男の拳を掴む手の力を急激に強めていく。
モヒカン男「がぁっ……！」
モヒカン男の右腕に高圧電流が流れたような衝撃が走る。瞬時に拳を押し戻されるモヒカン男。
龍馬「ほあったぁ！」
間髪入れず、龍馬がモヒカン男の肋骨辺りに右足での横蹴りを突き刺す。
モヒカン男「うごうっ！」
激しい痛みで、モヒカン男がたまらず膝をついた。
龍馬「たっ！」
頭の位置が腰の高さまで下がったモヒカン男の顎を狙い、龍馬が左中段回し蹴り（※左ミドルキック）を叩き込む。仰向けに倒れたモヒカン男は白目をむいて気絶してしまった。
網場「……！」

龍馬「オラ、続きやんぞ」
背負っていたギターをゆっくりとその場に下ろしながら、網場を睨みつける龍馬。
網場「…フン、なかなかやるな。まぐれで一人KOしたぐらいでうかれてんじゃねーぞ」
龍馬「別にうかれてなんかいねーよ」
網場「オレはおめーより1年年上なんだ。3分後にはその壁を思い知るはずだぜ」
龍馬「……」
龍馬は耳の穴をほじくりながら聞き流している。
網場「くそっ、なめやがって！　おいお前ら、沢村はオレがやる！　残りの二人をやっちまえ！」
ムキになったような口調でスネ夫男、トンガリ男、丸尾男に指示を出す網場。
祐介「おいおい、こっちは3対2かよ。誰を攻撃しようか迷っちまうな」
延彦「とりあえずそれぞれで的を決めて、そいつを集中して倒しちまおう。そうすれば2対1でこっちが有利になる」
祐介「なるほど、それがいい。それでいこう」
龍馬「よし、いくぞ！」
　龍馬、祐介、そして延彦の3人は一斉に突撃していった。
網場「なめんな！」
網場が龍馬に右ストレートを放つ。しかし、龍馬はこれを屈んでよけながら右中段逆突き（右ボディストレート）を網場の腹部に突き刺す。
網場「ぐっ…！」
網場は慌てて左のフックを打つが、龍馬は既にバックステップで距離をとっていた。
網場「野郎……！」

その頃美穂と明子は、健と共に体育館1階の小アリーナへ来ていた。「龍馬たちが空手部員を名乗る連中に連れて行かれた」という美穂と明子からの知らせを受けて、事の真相を確かめるべく空手部の部長である土岐（ときに会うためだった（ちなみにこの日は空手部の稽古日になっていたのだ）。

美穂と明子から事情を聞いた土岐は大変驚いていた。

土岐「待ってくれよ！　オレらはそんな野蛮なことはしないぞ！」

美穂「すいません…やっぱりそうですよね」

明子「ウチらもおかしいとは思ってたんです。疑うような言い方してすいませんでした」

土岐「いや、いいんだ。キミらはまだ新入生なんだし。それにしても、空手部員を騙るなんて、いったい誰が……」

健「心当たりはないのか？」

土岐「うーん……」

体格的には恒一と同じぐらい（身長171cm、体重62？ほど）の土岐は、刈りたての坊主頭をかきむしりながら必死に記憶の糸を手繰り寄せていた。

やがて、一人の人物に辿り着いた。

土岐「…まさか…網場……？」

健「アミバ？　誰なんだそいつは？」

土岐「ウチの2年なんだけど、今はいわゆる幽霊部員になってるんだよ。部活にも顔を出さないで、不良連中とつきあってるって聞いた。あいつならやるかもしれない…！」

健「空手部崩れが不良連中と……こいつは、もしかしたら…ちとめんど臭そうだな。事が大きくなる前に何とかしないと」

美穂「え？　どういうことですか、それ？」

健「…いや、何でもねぇ。よし！　じゃあそのアミバってヤツを捜すぞ！」

美穂「あ、はっ、はい！」

明子「そのアミバって人、どこにいるのか見当はつきますか？」

土岐「ごめん、最近は学校でも顔を見なくなったからわからないんだ」
健「だったらシラミ潰しに学校中捜すまでだ！」
美穂「そうですね」
土岐「ケン、こうなったらオレも一緒に行くぞ。部長として責任をとらなきゃいけないしな」
健「わかった。だけど責任をとる必要はねーと思うぜ」
土岐「……とにかく一緒に行かせてくれ」
健「おう」

？「ケン！　オレも一緒に行かせてくれ！」

背後から健を呼び止める声がした。一同が後ろを振り返ると、背が高くスラッとした男子生徒がこちらに駆け寄ってきた。
近くまで来ると、爽やかな顔立ちだが本当に背が高いのがわかる。１９０ｃｍはあるだろうか。制服姿だからわからないが、おそらくはバスケットボール部かバレーボール部の生徒だろう。
健「進藤！　どうした？　今日バスケ部は練習じゃないのか？」
この進藤という男子生徒は、どうやらバスケット部員のようだ。
進藤「練習どころじゃねーよ！　ウチの外山が空手部の連中に連れて行かれたらしいんだ！」
土岐「何だって！？」
健「トヤマ？」
明子「えっ！？　外山くんが！？」
進藤が外山について説明する前に、明子が驚きの声をあげた。
進藤「おっ、もしかして外山の知り合い？　クラスメイトか何かかな？」
明子「いえ、クラスは違うんですけど、ウチら中学時代バスケ部だったんで彼の存在は知ってたんです」
美穂「外山くんは有名でしたから」

進藤「そうか。じゃあ、沢村と佐山って1年生について何か知ってる？」
美穂「沢村って、沢村龍馬くんと佐山祐介くんのことですか？」
進藤「そう！　上加中バスケ部出身の」
明子「あの…二人ともクラスメイトですけど」
進藤「え？　マジ？」
健「ちょっと待てよ進藤。そいつら二人ともウチの1年だぜ。トヤマってのとどんな関係があるんだ？」
進藤「いや、目撃者の話だと、外山は“沢村と佐山ってヤツの秘密を教えろ”って言われて連れて行かれたみたいなんだ。外山のヤツ、昼間に学食で沢村くんと佐山くんに“バスケ部へ入らなければ秘密をばらす”とかなんとか言って騒いだらしくて。あいつ、上加中出身の二人をバスケ部へ入れたがってたからなぁ…。おそらく空手部のヤツらもそれを聞いて外山を連れ去ったんだろう」
健「トヤマってヤツを連れ去った空手部とリョウたちを連れ去った空手部は、おそらく同一人物――土岐が言ってたアミバって野郎だろうな。そして、トヤマはあいつらの秘密とやらをしゃべらなかった。だから次にリョウたちを連れて行った……」
土岐「網場のヤツ…何のために……」
明子「そうですよね、目的がわからないですよね」
健「相手が不良連中だってことを考えると、“秘密をばらされたくなければ自分の仲間になれ”とかなんとか言って舎弟か何かにしちまうつもりなんじゃねーかな」
明子「仲間…？」
美穂「どうして仲間にする必要があるんですか？」
健「よくヤンキーマンガとかにある“天下獲り”だよ。裏で学校を仕切ろうっていう、アレさ。そのためには力のある人間を味方につけるのは大事なことだからな。見た感じ、あいつらは強そうだ。だから目をつけられちまったか」
美穂（確かにリョウちゃんたちは強いけど…）

美穂には、その辺の心理が到底理解できそうになかった。
健「…そもそも、リョウとユースケにどんな秘密があったんだ？」
美穂「いえ、二人とも“秘密なんかありゃしない”って言ってましたよ」
進藤「もしかしたら、外山のヤツ、デマカセまで言って勧誘しようとしたんじゃ…！」
健「そこまでしてあいつらをバスケ部に入れたかったのか。すげー執念だ。でも、既にあいつらは軽音部員だ。そこんとこちゃんと言って聞かせないとな、部長として」
進藤はバスケットボール部の部長だったようだ。
進藤「…そうだな。なんだか申し訳ない」
健「謝るのは事が済んでからだ。リョウとユースケをヤツらの仲間にするわけにはいかねぇ！　行くぜ！」
美穂「はい！」
健「…でも、全員で固まって動くのは効率が悪いな。よし、二手に分かれよう。美穂ちゃんとアッコちゃん（※明子のこと）はオレと一緒に1階から捜そう。土岐と進藤は3階からあたってくれ」
美穂「はい！」
明子「わかりました！」
土岐「わかった」
進藤「いいぜ」
健「見つけたらケータイに連絡をくれ」
　健たちは体育館を飛び出した。土岐と進藤が影を縫うように階段を駆け上がっていく。健と美穂、そして明子も片っ端から1階の各教室を見て回る。
　1階にはいないようだ。仕方なく2階へ上がる健たち。
？「あのガキどもはこんな所にはいねーぜ！」
健「？」
健たちの背後から声がする。

振り返ると、ヒゲ面の中年男性教師が立っていた。健たちは見ていないが、昼間に龍馬が２０円を手渡した、あの教師だ。

健「あっ……！」

Track　3：南陽ルーキー争奪戦？

網場「がぐうっ！」
龍馬のヒザ蹴りを腹部にくらい、網場はたまらず地面にヒザをついた。
龍馬「…おい、そろそろ3分だぞ。壁を思い知らせるんじゃなかったのか？」
網場「く…このガキ……！」
龍馬「ガキったって、オレはお前より一つしか歳が違わないんだけど？」
網場「や…野郎……！」
肩で息をしながら、網場が身構える。
龍馬「ほれ、もっと打ってこいよ！」
網場「なめんじゃねぇぇぇぇ！！！」
網場、渾身の前蹴り！　龍馬の腹部に見事命中した。何歩か後ろにのけ反り、体勢を立て直す龍馬。
網場「くたばれやぁ！」
更に攻撃を加える網場。大振りの右フックを仕掛けるが、龍馬はこれをしっかりガード。続けざまに左フックを打つ。これも龍馬に防がれる。
網場「はぁ…はぁ…」
網場の足が止まった。スタミナが尽きてきたようだ。
龍馬「どうやらそこまでみてーだな」

　祐介と延彦はスネ夫男とトンガリ男を既にノックアウトしており、残る丸尾男をどちらが倒すかで話し合っていた。
祐介「とりあえず、ここは平等にジャンケンだな」
延彦「まぁ、そうだな」
祐介と延彦はジャンケンを始めた。この隙に凶器を使ってどちらか

を不意打ちすれば形勢が逆転しそうなのものだが、丸尾男は恐怖感からそこまで頭が回らなかった。
ジャンケンの勝者は祐介だった。目を少しだけ血走らせ、まるでライオンが鹿を捕えるかのように丸尾男を睨みつける祐介。
祐介「覚悟しろよぉ～、この野郎め」

龍馬は、スタミナの尽きた網場に左アッパーをくらわせ、アゴをカチ上げた。とどめに右の上段突きを顔面へ叩き込むつもりなのだろう。
左足で思い切り床を踏みしめ、拳を走らせようとする龍馬。
その一方で、祐介も丸尾男に右の上段突きを仕掛けようとしていた。

健「ストーップ！！　そこまでだ！！」

龍馬たちの動きが一斉に止まる。
屋上の出入り口に、健が立っている。彼の脇には空手部主将の土岐や、バスケット部キャプテンの進藤もいた。傾き始めた西日に照らされ、彼らの黒い学ランが淡い金色に輝いていた。更に西日は、健の背後にいたブレザー姿の女子生徒をも照らしていた。美穂と明子だ。
龍馬たちはそれを見て察知する。美穂と明子が健にこのことを知らせたのだ。この程度のことなら自分たちで対処できるから、別に知らせるまでもなかったのに――。
美穂と明子も、そんな龍馬たちの気持ちをその表情からすぐさま読み取っていた。
美穂「ごめんね。やっぱり心配だったから……」
明子「空手部の名前を騙ってたってのもあったし……」
龍馬「……関係ねーよ。こういう手合いはこうするのがいちばんなんだ。どうせ空手部ってのもウソなんだろうし」

健「リョウ、そのアミバってヤツは実際に空手部員だぜ。他の連中はわからんがな」
龍馬「えっ？」
健「正確には幽霊部員らしい。今は稽古にも来てなくて、不良連中とつるんでるって話だ。なぁ？」
健は、ここから先の説明を促す意味で、土岐に目配せをした。
　促された土岐は、真っ先に網場のもとへと歩いて行った。一歩一歩、ゆっくりとした足取りで。
　土岐のただならぬ目つきを見た龍馬も、反射的に大きく後ずさりして進路をあけた。
　やがて、網場の目の前まで来た土岐は、スッと立ち止まるとフラフラになりながらもようやく立っている状態の網場をじっと見据えた。
土岐「……」
網場「……な…何だよ。今更オレに何を話そうってんだ」
土岐「網場、お前は何のために空手をやってきたんだ？」
網場「へッ、知るかよそんなこと。何でそんなこと答えなきゃいけねーんだ」
龍馬「この野郎、何てことを…！」
横で聞いていた龍馬が食ってかかろうとする。
健「リョウ」
いつの間にか背後に立っていた健が龍馬を制すると、土岐の横に並んだ。
健「アミバっていったな。オレは軽音楽部部長の甲本だ。ここにいる沢村・佐山・山崎の3人はウチの有望な新入部員なんだよ。他へ行く気はねーみてーだからよぉ、今後スカウトの類はやめてくんねーか？」
言葉を発する健の目つきは、恐ろしいまでの殺気がこもっていた。
ここでイヤだと言えば殺されると網場は直感したに違いない。
健「…オレの言うことがわかったら、さっさと仲間を連れて立ち去

れ。それから、二度とオレらに関わるな。お前らの仲間にも伝えとけ」
網場「……」
土岐「網場、お前はもう空手部を辞めてくれ。今更言うことじゃないかもしれないがな」
網場「言われなくたってそのつもりだよ。あんな退屈なモン、こっちから願い下げだ」
龍馬「こいつ…まだ言うか！」
？「おいおい、何て言い草でぇ！」

今度は誰だろうと、龍馬は屋上の入口を見た。
龍馬「あ…！」
あのいかつい風貌の教師だ。昼間に食堂で２０円を貸した、あのヒゲ面の中年男性教師だ。
男性教師「そういうものの言い方は嫌われるぜ、アミバくんよ？」
網場「う……くそっ」
男性教師「ボコボコにされなかっただけマシだぜ？　ほら、わかったらさっさと行きな。それからよ、今も言ってたけど、変な気は起こすなよな。オレらは面倒なことは御免なんだ」
網場は何も言わず、気絶しているスネ夫男を抱えて屋上を去って行った。丸尾男も、慌ててモヒカン男を抱えて網場の後を追った。
男性教師「そうそう。割と物分かりがいいじゃねーか」

網場たちが去った屋上で、ひと呼吸おいた土岐が龍馬に向き直る。
土岐「申し遅れたね。空手部の主将をやっている土岐だ。キミが沢村くんかな？」
龍馬「はい」
土岐「今回はウチの網場が迷惑をかけた。幽霊部員だったとはいえ、本当に申し訳ない」

言うと、土岐は深々と頭を下げた。
　龍馬はどう返事をしたらよいかわからなかった。今回のことは網場たちが勝手にやったことだ。それを直接的には無関係の土岐が代理で謝罪するなんて……。
健「頭を上げろよ、土岐。今回のことは別にお前が悪いわけじゃないんだし」
男性教師「そうだぜ！　現にあいつはもう空手部じゃねーんだからよぉ！」
土岐「いや、しかし……」
男性教師「細かいこたぁ気にすんな！　はっはっはっ！」
男性教師は土岐の背中をバシバシ叩きながら笑った。自然と土岐の顔にも納得の表情が浮かんでくる。
祐介「しかしケンさん、どうしてここがわかったんですか？」
健「この矢沢先生が見てたんだよ。お前らが不良連中に連れられて階段を上っていくところをな」
この教師は矢沢という名前らしい。
矢沢「おう、よーく見たらよぉ、“あの坊主頭、昼間オレに２０円貸してくれたヤツじゃねーか！”って思ってよ」
祐介「坊主頭……リョウのことかな」
延彦「リョウ、２０円って何のことだ？」
龍馬「あぁ、昼間学食で食券買う時に小銭が足りねーっていうから貸したんだよ」
矢沢「そう！　あん時は助かったぜ！　ありがとな！」
龍馬「いえ、どういたしまして。でも、こんな乱闘騒ぎ起こしてすいませんでした」
矢沢「あ？　気にすんなよ！　若いうちはそれぐらいヤンチャじゃなくちゃあな！」
そう言って、矢沢はまた豪快に笑い飛ばす。どうやら不問にしてくれるようだ。

進藤は、網場たちにやられて気を失っている外山を起こそうと、必死に呼びかけていた。
進藤「外山！　おい外山！」
外山「う…うーん……」
ようやく気がついたようだ。まぶたが重々しく開いていく。
進藤「気がついたか！　外山、大丈夫か！」
外山「進藤さん……」
わけがわからずキョトンとした表情の外山だったが、一瞬で記憶が蘇った。
外山「そうだ！　オレは変な連中に絡まれてボコボコに殴られて……」
龍馬「そうだよ。お前のせいでオレらまでとばっちり受けちまったよ！」
外山「さっ、沢村！」
龍馬「この野郎、大声で秘密がどうとか言うからこんなことになっちまったんだぞ！」
祐介「そもそも、オレらに変な秘密なんかねーからな。何であんなこと言ったんだよ？」
外山「……沢村と佐山には、どうしてもバスケ部に入ってもらいたかったんだよ。お前らがいれば絶対に南陽は強くなるからな。それが軽音楽部に入るなんて……」
祐介「それであんな脅しまでかけたのかよ？」
龍馬「すげー執念だな。ある意味感心するぜ。でも、オレらはもうバンドやるって決めてんだ。悪いけどあきらめてくれ」
進藤「外山、お前の気持ちはわかるけど、無理して勧誘しなくてもいいよ。これ以上は迷惑なだけだ。全国へ行きたきゃ、もっと必死に練習すればいいんだしさ」
外山「…でも、オレはお前らが心変わりしてバスケ部に来てくれるまで待ってるぞ！」
外山は龍馬と祐介を指差して言い放った。

龍馬「え……」
祐介「ダメだこりゃ…」
龍馬も祐介も呆れかえっている。
矢沢「外山くん…だっけ？　お前さんの執念は確かにものすげーけど、この二人の意思はそう簡単には変わらんぜ？」
龍馬も祐介もそれに頷いている。
矢沢「なんせ入部届を出す前から部室使ってバンド演奏するぐれーやる気らしいからな。そうなんだろ？」
矢沢が龍馬たちに確認をする。
龍馬「はい……ん？？」
龍馬たちの頭上に疑問符が浮上する。
延彦「あの、どうしてそれを……？」
矢沢「ミチヨから聞いたんだよ」
祐介「ミチヨ？　ミチヨって、あのミチヨさん？」
矢沢「ん？　そうだけど……」
矢沢は、龍馬たちがどうして混乱しているのかがイマイチわからなかったようだ。
龍馬「あ……もしかして……！」
健「あ、まだ言ってなかったっけ？　矢沢先生は軽音楽部の顧問なんだよ」
祐介「顧問？」
龍馬「こっ、これは失礼致しました！」
矢沢「なんだ、まだ聞いてなかったのか。オレは軽音楽部顧問の矢沢だ。よろしくな！」
龍馬「よっ、よろしくお願いします！」
龍馬たちは深々と頭を下げた。
矢沢「ちょ、ちょっと、頭上げてくれよ。そんな堅苦しい挨拶は抜きにしようぜ。な？」
龍馬「あ、はい、すいません！」
龍馬は照れ臭そうに、頭をぼりぼりとかいた。

矢沢「さてと……そろそろ部室へ行くとするか。今日は新入部員も含めての初顔合わせだったよな？」
健「そうです。オレら以外はみんな部室で待ってます」
矢沢「そうか。んじゃ、さっさと行くぞ」
健「はい」
　矢沢が先に屋上を去る。それに続き、健も階段を下りていく。
　龍馬が立ち去ろうとした時、後ろから進藤が声をかけた。
進藤「今回の件、オレからも謝るよ。外山には後で言って聞かすから」
龍馬「…頼みますよ。また教室に乗り込まれちゃたまりませんからね」
進藤「わかった。ホントにすまなかった」
進藤が頭を下げる。外山は少し気まずそうにうつむいていた。龍馬にはそんな外山の姿が見えてはいたが、あえて気づかないふりをしてその場を立ち去った。

　軽音楽部の部室へ向かう途中、健が龍馬に耳打ちをしてきた。
健「リョウ、ちょっといいか？」
龍馬「何です？」
健「今日やりあった連中だけどな、仕返しに気をつけた方がいいぞ」
龍馬「仕返し？　いや大丈夫っすよ。あいつらたいしたことなかったっすから」
健「まぁ大丈夫ならいいんだけど、あいつら、確かこの学校でもでかいグループにいたヤツだったはずだから面倒なことになりかねないって思ってな」
龍馬「そういう意味ですか…。まぁ、何もないことを願いましょう」
健「あぁ、そうだな」

　果たして、本当に不良グループからの報復はあるのだろうか。しかし、そのようなことをいちいち気にしていたら毎日が楽しくない

――そう思う龍馬たちだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7549m/

The Great Punks

2011年7月2日21時44分発行